アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

国立公文書館
分類 警察庁
9
件名 46
整理番号 15－4
636

昭和七年三月

國家社會主義運動の理論

警保局保安課

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

国家社會主義運動の理論

目次

頁

一、概説 …… 一

二、国家論及び国家主義 …… 二

三、及資本主義 …… 十二

四、皇室論及び日本主義 …… 十八

五、土地財産(生産權)奉還論 …… 二十二

六、及国際主義 …… 二十七

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

國家社會主義運動の理論

(一)概說

國家社會主義は其の根本に於て一つの国民間に普遍的なる氣分即ち愛国心と、資本主義の弊害に対する反感から出発するものである。特に我国に於ては明治時代から通じて強く鼓吹された国家主義は国民の意識の中に強く根を下し、明治末年の個人主義乃至自由主義、大正年間に於ける民主主義、更に社會主義共産主義の思想の洗禮を受けたる後も此等の思想に依り資本主義の弊害に就いて覺醒せしめられつゝ尚国家主義の思想は深く民衆の心の中に殘り、今回の滿洲事変に際しての如く折に觸れて強く表現されて来たのである。此の大衆の心裡に於ける愛国心と反資本主義の結合に就ては高畠素之は要するに我が大衆は愛国心に於ては国民的であり、無産者たる經濟上の階級としては強烈なる

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

破壊心を有せざる傾向を有してゐる。勿論此の二つの
心理は一定の主義主張となる程に理智化されてゐない。それは
一種の本能として作用してゐるに過ぎないと云ひ、更に然し乍
ら此の本能的心理が一度び理智の力に依つて組織立てられたる
時其處に一定の主義が成立して来る。我々はそれが一面に於て
は国家主義となり、他面に於ては社會主義となるべき運命に置か
れてゐる事を信じて疑はないものである。「批判マルクス主義」
百六十一頁）と論じ此の大衆の普遍的心理の必然的なる発展として
国家社會主義が発生し来るのであると説明してゐる。

国家社會主義は其の提唱者が自ら一の氣分に基き発生せるも
のであると上述の様に告白してゐる如くに、本来一の政治理論、社
會理論として、アカデミカルな理論として充分に発達せるもので
はなく現在に於ては未だ尚国家社會主義を説く各人の学説の間
にも幾多の矛盾が見られ此端に云へば国家主義と社會主義との

混合物であるとも云へない事はないのである。其の一の完成
せる体系となるには將来多くの時日を要するものと考へられる
のである。

以下 国家論、及資本主義論、皇室論、生産機奉還論及及国
際主義論等に分つて記述する。

（二）国家論及国家主義

国家社會主義の理論的根據の中心と言ふべきは国家の本質を
如何に認識するかと云ふ事に存する。即ち国家本質論よりして
国家社會主義の重要なる一面たる国家主義が導き出されるので
ある。

国家社會主義は自由主義の国家を以て国民の私有財産及生命
の安全を保護する為の消極的必然的悪」と見做す国家観念及マルク
ス主義の国家を以て支配的階級の搾取維持機関と見る国家
観を共に排斥する。自由主義は国家の存在を認むを得ずとは認

めるが出来る丈け国家の活動の範囲を狭少ならしめんとする。

又マルクス主義に於ては国家の本質的機能は階級搾取の維持なるが故に国家は搾取廃絶後は消滅すべしとするのである。尚国家社會主義の国家観が一擲に国家機構を覆滅して人類の自由結合社會を造り出すべしと論ずる自政府主義の其れと最も尖鋭に対立するのは勿論である。

自由主義、自政府主義、マルクス主義の国家観に対立して国家社會主義の主張する国家観には二つの流れがある。即ち高島素之の語を借れば倫理的国家観と機能的国家観である。（「批判マルクス主義」一〇四頁参照）前者はロドベルトス及びラッサーレの説くもので国家を以て階級対立の結果に非ずして寧ろ国家に依つてのみ人類の自由と幸福と発展とは実現されると云ふのであり、且つ生産機関の私有が撤廃された時国家は初めて其倫理的

本質を完全に発揮すると説くものである。後者は高島素之及び其の傾向に属する者が説くもので社會学的なる国家観を主張し、社會的機能分化の法則により統制の社會的機能が分化独立し一つの地域的結合社會の規制（統制或は支配）機能が特殊の階級に依り負担される時始めて本質的国家が成立すると論じ、現在の資本主義国家に搾取者が既成支配機関及機能（即ち既成国家）を利用して搾取の維持と被搾取者の屈伏とに役立たせているものに他ならぬと見るのである。

扨て倫理的国家観と機能的国家観とに比すると我が国に云つてみる。（「批判マルクス主義」一〇五頁）

斯種の国家社會主義（ラッサーレの倫理的国家観）に比すると我々の国家社會主義は国家と支配（厳密に云へば階級的支配）との不可分性を認める出発点に於て寧ろ自政府主義やマルクシズムに近い。然し又他方にプロレタリアの政権把握が国家消滅の直接

的前提とならずして寧ろ国家本質の発揮に到らしめるといふ
形式的見解に於ては我々はラッサーレ等の国家社會主義と一括
されて無政府主義及マルクス主義と対立することゝなる」と。
然しながら現在の国家社會主義論者は必ずしも此を区別して
ゐる譯ではない。津久井龍雄が「国家と階級の問題について」（「日
本社會主義」十二月）に於て次ハ如く云つてゐるのは此の適例であ
る。
「国家社會主義をマルクス社會主義に対して最も判然と分劃す
べき点は、後者の及国家主義、階級分裂主義に対して国家第一主
義、国民全体主義になければならぬ。然して国家主義、国民主義の
特質は何かと云へば国家国民の全体的発展向上を以て其の中核
的目標とするといふ点に存するのだ。此の主張の道徳的根據は
我々は個人的乃至階級的利己主義を棄て、国家を発展向上せし
むるといふ大目標の中に自己を解消せしめねばならぬとする点

に存し世界観的根據は世界人類の向上進化は各国家各国民が
各々其の有する傳統と生命力とを十分に発揮し合ふと云ふ以外
にはなく漠然と抽象的に国際正義とか人道とか云ふ事を叫ぶの
は一つのナンセンスに過ぎないと云ふ認識に立つ点に存する」と。
勿論此は明にヘーゲル的国家観念に基礎を持つラッサーレ流
の国家観を示すものではないが併し「其の道徳的根據は我々の個
人的階級的利己心を捨て、国家の発展と云ふ大目標の中に解消
せしむる事である」と言ふ如き点は国家に道徳的意義を認めてゐ
る事を示すものだと云ふ事が出来る。
現在国家社會主義を説くものは特に国家論に於て多かれ少か
れ高島素之の影響を受けてゐる。此の高島の国家論が先づ国家
社會主義の説く理論の中で最も整備せるものであり且つ根本に
觸れたものである。
此はマルクス主義に於ける国家論の未完成正統的なるマルク

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

ス主義者と見らるるレーニンのプロレタリア国家を経過して高度の社會主義社會に発展すると云ふ理論に於ける矛盾、社會民主主義の系統に属するマルクス主義者たるベルンシュタイン、ベーベル、カウツキー、マツクス、アドラー等が必ずしもマルクスの国家消滅論を遵守せずして「自由国家」「未来国家」等の名に於て將来に於ける国家の永續を認め或は「マルクスの説くが如き人類の自由なる結合社會は望見し得らるゝ將来に於ては実現し得るものとは認め難い」(カウツキー)と云ふが如く変化せる事等を指摘し之を批判する事に出発し、国家を以て階級搾取維持機関であるとする事に反対し、從つて資本主義の廃絶と国家の廃絶とを同一視するが如き考へ方に反対してゐるのである。

以下先づ高畠の主張する国家本質論に就て記述する。(一)国家の意義(二)発生的に見たる国家(三)將来の国家(四)マルキシズム国家観

に対する彼の批判の要点の四つに分つて述べる。

(一)彼は国家を以て一つの地域的社會に於て階級支配が行はるるものであると定義する。即ち国家の本質的要素たるは地域社會及び階級支配の三つで土地人民及主権より成ると云ふ旧来の表現を單竟同じ実質を異つた形に即ち法制的形式的の形に云ひ現したものに他ならぬと云ふのである。然して彼の云ふ階級支配とは規制の機能が同一の個人又は集團を中心とする同條的集團に依り反覆的に負担さるる事に依り生ずる諸の階級に依る支配を指すものであり、然して階級の成立は社會に於ける規制機能分化の不可避的なる結論であると云ふのである。且つロシヤに於て革命後共産党が新たなる支配階級として出現したるが如く人間の社會的本能に根ざす優勝欲の発動に依り階級即ち社會に於て支配機能を負担する特定の集團は常に再生産されると云ふのである。

(二) 彼は国家の成立を論ずるに當り、国家発生の根據を人間が他動物との生存競争上の必要から社會的結合の下に生活して生じたる各種の社會的本能に求めてゐる。即ち生物本能中最も原始的普遍的なる自己保存欲から社會的結合を為すに至り次で社會的結合を強化する作用を有する社會的本能を派生する。此の社會的本能は猜疑心や優勝欲の如き一見反社會的本能たるが如き対抗力を発生し之が自己保存欲と結合して一種の複雑なるエゴイズムを構成する。併して此のエゴイズムを放任してゐては社會的結合は破れるが社會的本能のみでは充分に之を抑制する事は出来ぬと言ふので社會保存の必要上から自然的無意識的に第二次的社會的結合素因として支配と云ふ機能が発動して来ると云ふのである。併して人類の社會に於ては此の支配(統制、規制)機能は如何なる秩序で発動してゐるものぞ。社會とは単に個々

人が集合してゐると云ふだけのものではなく此の集合が外部的に規制されたものでなければならぬ。而して斯る規制の方面から見れば如何なる社會も秩序であり法的秩序であるが故に社會が国家となるには規制の機能が分化独立し(レ)其れが一定の系統に依り負担される事を要する。

彼は原始的の種族社會から国家の発生する経路を次の如くに説明してゐる(「マルクス主義十二講」一六六頁)

「規制機能(支配機能)の分化は原始的の種族社會に於ても既に或程度まで進んでゐた事は事実である。其處には武將や裁判官の形を以て支配機関が個別的に特殊化された事実も示されてゐる。併し斯種の社會を以て直に国家と呼ぶ事は何人も反対するところであらう。斯種の社會が国家となり得る為には支配機能が先づ支配機能其自身として總括的に分化独立する事を要する。而して此の支配機能分化の事実が極めて明瞭なる形を採る迄

うになつたのは一つの種族社會が他の種族社會を征服して、征服した方の種族は專ら支配者たる位置に立ち、征服された方の種族は專ら被支配者の位置に立ちて此處に支配階級と被支配階級との区分が確立されるに至つた時である。即ち種族社會の内部に於ける支配機能分化の内在的傾向が原因となり種族対種族の外附的要素が機縁となつて茲に始めて階級支配なるものが成立しそれと共に嚴密の意味の国家が生ずる事となつたのである」と。

(三) 次に將来に於ける国家即ち社會主義社會實現後に於ける国家の永續性を論じ之を根據付けるに階級支配の永續性を以てしてゐる。「階級成立の第一要素たるは支配機能の特殊化と云ふ事であつて此は社會が進めば進む程他の社會機能の分化特殊化と並行して益々著しくなる。支配機能特殊化の傾向は主觀的には支配欲望、優勝欲望の發動となつて現はれる。

社會主義の制度が實現されて、經濟上の不平等が廃除されたる晩には經濟上の優越に依つて優勝的の欲望を滿足させる事は不可能となるが、此の欲望其自身は決して消滅するものではなく寧ろ益々旺盛になつて行くと想像される。優勝的の欲望は學問藝術其の他の方面にも發動するが、就中政治の部面に於てはそれが最も強く且つ露骨に發揮される事を想像し得る。

此等の点から推して社會主義實現後の社會には經濟上の搾取がなくとも階級支配の現象は永く存續し又不断に再生産されるものと推斷するの他はない」と。(「マルクス主義十二講」一六八頁)

要するに社會主義實現後にたとえ目的を存續するのみならず国家は搾取と結合したる特殊の形態から離れて本来の支配国家に復帰すべしと云ふのである。

(四) マルキシズム国家觀に對する批判の要点

マルキシズム国家論に対する批判――特に階級搾取的国家觀

及国家死滅に至るまでの経路に関するマルキシストの説明に於ける矛盾撞着の指摘は高畠の国家論の出発点をなすものである

(1) 第一に資本主義制度の分析解剖に依り産業国家主義の結論（高畠は「少数大資本家に代つて生産機関の所有並に産業の管理を担任すべき社會は現実的には国家を措いて他には求められない」と云つてゐる）に達したるマルクスが階級的搾取廃絶後の国家の死滅を主張するのはマルクス主義の歴史的煩悶であるとし、此はマルクスの思想の現実的科学的一面と空想的狂熱的他面との撞着であると云つてゐる。

(2) 次に高畠は前述せる彼の階級支配を本質なりとする国家観に依つて国家をば「夫々の時代に於ける搾取階級が其外部的生産條件を維持し特に又被搾取階級をば當時存在する生産方法に依り與へられたる圧伏條件（奴隷制、農奴制、又は賃銀奴隷制）の下に抑置せんが為の一機関である」（「及デューリング論」）と見る所のマルクス主義の階級搾取維持機関的国家観を排斥してゐる。即ち国家の成立は統制機能の分化に依るもので決して経済上の階級対立を前提しない。国家の成立は一定形態の搾取は勿論搾取其物に先行するものであり搾取階級は單に政治的の国家を利用したものに過ぎない。夫々の歴史的経済制度に伴ふ支配関係の特殊関係たる封建国家資本主義的国家等は各々同一の本体たる国家が異れる経済制度の下に採る異つた形態に過ぎない。国家とは寧ろ一つの地域社會に於ける支配関係其自体であると云ふのである。

(3) 次に彼はプロレタリア国家即ち社會主義が実現されて国家が死滅するまでの段階としてのプロレタリア独裁国家に関するマルキシズムの理論を攻撃してゐる。

エンゲルスが反デューリング論に於いて「プロレタリアは国家権力を奪取して先づ生産機関を国有にする。然しながら斯くする事に依つてプロレタリアはプロレタリアとしての其自身を廃絶し一切の階級差別及び階級対立を廃絶する。（中略）国家は遂に事実上全社會の代表となつた時其自身を不用に帰せしめる。

圧伏すべき何等の社會階級も最早や存在しなくなるや否や階級支配が廃絶され従来に於ける生産上の無政府を基礎とした個々の生存競争が廃絶されると同時に又之に基ける諸種の衝突や過剰が除去されるや否や最早や特殊の圧伏権力たる国家を必要とする訪の圧伏せざるべき何物も存在せざる事となる。

現実に於て国家を全社會の代表たらしむる最初の行為、換言すれば社會の名に於てする生産機関の占取は同時に又国家が国家として為す最後の独自的行為である。

社會事情に対する国家権力の干渉は一つの部面から他の部面へと次第に不用になり遂には自然に寝入つてしまふ。人に対する支配に代り物の管理と生産行程の指導とが現はれて来る。国家は廃止されるのではなく自滅するのである。」と云ふてゐるのに対してレーニンは廃止されるのはプロレタリア革命に依りブルジョア国家が廃止されるのであり自滅するのは社會主義革命の実現後に當時尚残存せるプロレタリア国家が自滅するとの意味であると説明してゐる。即ちプロレタリア革命後は階級搾取はなくなり「国家としての国家」は廃止されるが尚階級支配は残る（プロレタリア独裁制に依りブルジョアの訪有を剥奪するのは収奪であり餘剰労働の搾取ではない。）故にレーニンの訪謂「半国家」即ち搾取を抜きにした単なる階級支配権力は残ると云ふのである。

之に対し高島は第一にマルクスの階級搾取維持機関と云ふ国家観からして階級搾取廃絶の為の訪謂プロレタリア国家を資本

主義国家と同一に国家と呼ぶ事は矛盾してゐる。第二にプロレタリア国家と云ふもの丈を認む事は搾取なき社会にも階級の存在を認む事となり階級の本質的要素を搾取に置く社会のマルクスの唯物史観に反する。と論じ要するに之は搾取は消えても国家は無くならないと云ふ非マルクス的現実と国家は搾取支配の体現だと云ふマルクス的学説それ自身との間の矛盾が現はれたるものに他ならぬと結論してゐる。

以上に於て高畠素之の国家論を稍々詳細に説明したが現在の国家社會主義者も其の国家論に於て前述せる如く始ど之を踏襲してゐる。津久井龍雄の如きは「最近我国内外の急激なる客観的諸情勢の推移は自らにして高畠氏生前の社説の変改を要求して止まざる部分もある」と云ひながら『国家社會主義の国家の見方

』(『日本的社會主義の提唱』二十八頁)と題して説く所は高畠の云ふ所と全然同じである。石川準一郎は『日本社會主義』に連載せる『マルクス主義か国家主義か』に於て国家を階級搾取維持機関とする事の誤りたる事を指摘し、更に進んで国家を階級支配の機関と見る事にも反対し「国家は今や単に支配機関として概念されねばならず、国家の本質は支配に在るものと認めなければならない。我々は斯く理解されたる場合に於ける支配を主として統制と呼び、斯く理解されたる場合の支配を統制組織と呼ぶ」と主張してゐる。此を以て見れば高畠の国家論と大いに対立してゐるが如く見えるが併し、此は階級なる概念に関する見解の相異に基くものゝ如くである。即ち石川は「国家は階級支配機関であるといふ時は単にそれが漠然と何等かの種類の階級的利益の為に用ひられる事を意味するのでなくして階級的利益の為の階級圧伏の為に換言すれば或る階級の利益の為に他の階級を圧伏

する為に用ひられる事を意味する。」と云つてゐるのである。

即ち高畠の云ふ階級とは分化独立せる支配機能の負担者の集団を云ふ故に事実上石川の云ふ「統制」と高畠の云ふ「階級支配」とは余り相異してゐないのである。且つ国家の定義に就いては彼も高畠と同様に国家の一定の地域的共同体に分化独立せる公的権力が存するものだとする説を取り国家の本質を「階級支配」に非ずして「統制」であるとする以外の点に於ては高畠の国家論と殆ど同一である。

赤松克麿も亦国家本質論に関しては略々高畠の国家観を採用してゐる。此は彼の「マルクス主義と国民主義」に述べてゐる事に就いても見られるのである。即ち其の二十頁乃至二十三頁に於て彼は以下の如くに述べてゐるのである。

「今日例へばロシヤの国家にしてもあれだけの強力なる国家を作り共産党独裁の下に一つの雄大なるゴスプランに依つて五個年計畫と云ふ風な一大事業を実行しつゝある。其の場合に於てもやはり権力が要るのである。其の権力は決して労働者から搾る権力ではない。併し作り複雑な高度に発達した経済を管理し指導する訳の機能としての権力強制力といふものは是は絶対必要なのである。搾取する事以外に人類の生活を統制する権力が必要だと思ふのである。」「故にプロレタリア国家は搾取がないから権力が消滅するといふのは詭弁であつて我々は搾取がなくとも国家は必要だ。凡そ国家とは旧式の言葉で言へば土地と人民と主権との三者が結合した訳の又類の社會生活の必然的な歴史途上に於ける一個の共同生活形態であるので搾取がなければ強制がないと言ふのは余りに観念的な考ではないかと考へるのである。（中略）今の資本主義国家を改造し資本主義を打倒して専制プロレタリアが天下を取つた場合に於ても日本の国家、日本

国家の強制力主権と云ふものは変ることはない。であるから国家の機能は従来資本主義的に運用されて居つたのが今度は社會主義的に運用さるるに過ぎない。かゝる国家機能といふものは人類に取つて必然的なる生活機能である。」

(三) 及資本主義

国家社會主義は資本主義及対の立場に立つ事勿論である。

此に就て共産党側は伊太利のファシストが始め及資本主義的スローガンを掲げて及資本主義的分子を其の傘下に集めながら、其の政権を握るに及び漸次及資本主義的色彩を失つて結局金融資本家と手を結び国家社會主義の国家主義のみが残存して社會主義の方の部分は消失してしまつた事を例証として日本の国家社會主義運動も世界的恐慌に際して金融資本の独裁下に苦しんでゐる小市民階級を主なる構成分子として現在に於て及資本主義を標榜してゐるが、やがては金融資本の前に屈伏するものであるも、否其の運動は大資本の隠れたる援助の下に唯及資本主義的口吻を以て粉飾してゐるのに過ぎないのだと云つてゐる。

併しながら日本現在の国家社會主義運動の中に流れる及資本主

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

義の潮流は相当に根底深きものであると見て差支へなく、將来の事は暫く問はず現在に於て其が反資本主義の運動であり進んで社會主義社會の實現を目標とするものである事は疑ひ得ないのである。

併して彼等は明瞭に資本主義打倒の立場に在ると云ふ事に依り右傾的及動派と区別さるべきであると主張する。「我国に於ける最近の国家社會主義運動の擡頭と從来の右傾反動派の動きとを一緒にして一般にファシヨの擡頭といふ風に呼んでゐるが此の両者の間には明白なる対立がある。」詳謂從来の右傾反動派は決して資本主義に対する態度を明確にせず―明確にしてゐれば資本主義擁護的にだ―意識的無意識的に資本の前衛たる役目を果して居る。（中略）此に対して国家社會主義は明白に資本主義打倒の立場に立つ。之が他の社會主義と異る所は社會主義の国際的實現に於ける空想的と現實的との差のみでなくて国内社會主義の實現に向つては最も勇敢なる闘争を為すものである」（津久井龍雄『日本的社會主義の提唱』九十六頁）

国家社會主義は其の社會主義論の中に多分にマルキシズムの理論を取り入れてゐるのである。殊にマルキシズムの理論中資本主義の經濟機構の解剖に関する部分、即ち資本主義の発達は依るプロレタリア階級の発生―中産階級の没落―階級斗争の激化、大資本に依る小資本の吸併―資本の少数大資本家への集中、産業資本主義より金融資本主義への轉移―独占的金融資本主義の實現等に関するマルキシズム的説明方法を認め且つ資本主義の集中集権化の傾向が社會主義經濟機構の胚芽たる事も肯定するのである。

故に資本主義反対の根據にも多くのマルキシズムの系へ方を取り入れてゐるのである。又国家社會主義者中社會主義より轉向せる者は、何故に国家主義を捨らなければならぬかを説くに

急であり、特に社會主義、及資本主義に就て理論を展開しないのである。且つ亦所謂日本主義に社會主義を取入れて国家社會主義に進まんとするものは、漠然と常識的なる社會主義の概念を受け入れてゐるもの、如く從つて及資本主義論に於て、国家社會主義に独特なる他の社會主義殊にマルキシスムに対して特異性を有する理論は余り見られないのである。

高畠素之が「国家主義者たるが故に社會主義者であり、社會主義者たるが故に国家主義者である」と言ひ、又石川準一郎等が「国家社會主義はマルクス主義の止揚であり、先づ第一に近世社會主義の帰結である」と主張し或は赤松克麿が「国民社會主義は社會民主々義の現実的発展である」と辯ずるのは、何れも其の及資本主義論に於てマルクス主義の分子を多分に継承せる事を示すものに他ならない。

唯我国の国家社會主義の最も大なる特色の一つは及資本主義の理論的根據として其の皇室論日本国体論と関聯して資本主義を以て日本の国体に反する経済制度であるとして其の非国家性非国民性を痛撃する思想が存する事である。

即ち「我々は端的に今の資本主義制度その者を否定する。我々が資本主義を否定する最大の理由は資本主義制度が個人営利主義に立脚するものであつて、国家の尊厳と国民の貴重とを事実に於て無視してゐるからである。そこで資本主義の否定に表裏すべき我々の社制度は当然に国民本位、国家本位の社會制度でなければならぬ。」（『批判マルクス主義』二百十九頁）と云ふ思想である。

此は日本に於ては本来凡ての物は天皇に属するものであると云ふ所謂皇有主義の思想と、第二は国家の発展する根本は国民の国家意識、愛国心である。然るに今日日本国民の愛国心は共産党事件に依りて見らるゝ如く大に動揺を来してゐる。此は資本主

義の害悪に由来するものに他ならぬ、故に日本の国家の擁護を圖り其の將来への発展を考へる時先づ資本主義を倒し日本の国家を其の弊害の及ぶ事から救はなければならないのであると云ふ二つの考へ方から出発してゐるのである。

第一の方に就ては後に生産擁拳圏論を説くに當り説明するが、要之「普天の下、率土の濱王土王臣に非るはなし」の考から資本家は本来皇有たるものを勝手に占有して経済的封建的諸侯の如き観を呈し一君萬民の国体の発現を妨げてゐるから此を打倒しなければならぬと云ふのである。

第二の方は、国家社會主義の主張する所を見るに之を資本主義の根本的精神たる營利主義が国民の愛国心に及ぼす弊害と資本の集中並併に依る大衆の貧窮化に依る国民精神の悪化の二つを理由としてゐる。

前者に付ては「(前略)―斯の如き營利萬能黄金萬能主義はいまやひとり資本家のみならず国民の凡ゆる階層に浸潤し、義理も人情も藝術も貞節も政治も国家も悉く之を挙げて利潤の為に偶像とする事を辞せない迄に至つた。我が国民の最近の愛国心の動揺退轉は実に此の恐るべき風潮に倚繋する所が甚大であると云ふ事が出来よう」(『日本的社會主義の提唱』二十頁)と云ひ後者に付ては「資本主義社會に於ては資本を持てる者と持たぬ者とを截然として区別し、資本を持つ者は之を利用して巨大の利益を独占し、持たぬ者は唯労力の提供に依りて僅に其の生活を維持するのみである。其處では労働力が商品化され、需要供給の法則に支配されてマルクスの謂ふ所の賃銀奴隷制を実現する。(中略) 斯くして同じ国民が同胞を商品化し奴隷化する。斯る相対立する両者間に同じ国民としての共通の同胞感は永く保たれ得る筈はなく愛国心の解消は當然の運命である」「之に加ふるに資本主義社會に

於ては大資本は小資本を圧迫して大多数国民は次第に無産者に没落し、富は次第に少数大資本家閥の手に壟断され、此處に無産者の團結的反抗を助長し、階級斗争は白熱化し国中国を樹つるの現象を示現する。マルクスがプロレタリアに祖国なしと喝破したのは主張としては誤謬であるが事実としては真理である。（中略）斯る不自然不合理なる社會狀態に於て国民の愛国心が伸張の機會を得ない事は云ふ迄もない」（『日本的社會主義の提唱』二十一―二十三頁）「資本主義と言ふ制度は国家共同の一体たるべき国民を二分して、一方には生産機関を独占する少数資本家の階級と、他方には一切の生産機関を剝奪された多数無資産者の階級とを明確に対立せしめる。資本主義に取つては多数の国民は人格であつてはならぬ。生産機関の所有者たる少数の『人格』者が依つて餘剝價値を搾取すべき商品の代表でなければならぬ。

19

「資本主義の下に於ける又は資本主義と相結んで存在する一切の制度一切の機関は資本家に依つて利用せられ得るのである。資本主義は国家の名に依つて多数国民の人格否定を支持し助長せんとする。かくして現実に目覚めた多数の国民は資本主義を敵視すると同時に国家をも敵視するやうになる。資本主義の倒れる時は国家の倒れる時だと信ぜられる様になる」（『批判マルクス主義』百六十五―百六十七頁）「資本主義の非国家性にして斯くの如しとすれば国家主義の見地よりして断然之を改革せねばならぬ事は云ふまでもなく、之を此儘に放任する時は国家は遂に内部より崩壊し去る運命を如何ともなし得ないであらう。かくして我々は此の利己本位的個人主義に立脚する資本主義を廃絶して国家本位社會本位の経済制度を樹立すべきであると主張する」（『日本的社會主義の提唱』二十三頁）等と論ずるのである。

扨て資本主義及対に関する議論は以上の如くであり此に就い

ては国家社會主義者の見解は始ど一致してゐるが、資本主義を打倒して後に建設すべき社會主義社會の構成を彼等は如何に見てゐるであらうか。

理論的に考へて、上述の双資本主義的日本主義から社會主義社會の建設の主張への間には飛躍がある、即ちマルクス主義理論は此處に取入れられて其の欠を補填してゐるのである。

国家社會主義の主張する社會主義社會は「天皇制の下に於ける社會主義体制」である。而して其の社會組織は厳密な意味の共産主義的社會ではなく、国家統制主義を加味した土地大企業大資本の国有に依る社會主義経済である。即ち相当の程度に私有財産を認め、個人の自由を認めるのである。高畠素之は資本主義に於ける営利主義の原則は自然に自由放任主義の下に於ける統制の効を発揮するとして「社會主義制度の下に於ては資本主義を構

成する一切の特徴的要素が廃絶され」て「営利の原則営利の欲望も亦當然に消滅する事となるのである。斯の如き社會主義制度の下に於て自由と統制との両要素は如何にして調節されるであらうか。此れ実に社會主義実現の第一歩に逢着すべき現実的の活問題であつて制度理想上に於ける集権的傾向と分権的傾向との抗争、生産上に於ける統一主義と联立主義、分配上に於ける差別主義と平等主義との対峙は畢竟皆此の問題の解決に対する苦悶の現れれと見る事が出来る。」（『批判マルクス主義』百二十三頁）

或は「国家政策としてはなるべく個々人の自由を制限しない様に努める事が賢明である。制限しなければ国家が立ち行かないやうな場合は勿論別であるが然らざる限り成るべくは制限を加へない様にする。少くともさう見せかける必要がある。此の意味に於て産業社會化は特に大産業大資本にのみ限定されるのを至当とする」（『批判マルクス主義』二百二十頁）と主張してゐるのである。

此の点に関して国家社會主義者の主張する政綱に付ては後に詳述するが一例を挙げて見ると津久井の私案として発表せる国家社會党政策大綱は「産業大権の確立を通じて資本主義的自由競争の制遏を為し私有財産の大制限重要産業の国営及び農村の振興を以て基調とする」と云ひ、最近発表せられたる日本国民社會党結成準備會の政策草案は「私有財産は之を国家に於て制限し超過額は国家の没収とす。国家統制の経済秩序を主体に置き自由経済秩序を副位に置く」と宣言し各々も多少の私有財産制度自由経済組織への譲歩妥協を示してゐるのである。

四皇室論及び日本主義

一般に云つて國家社會主義は國家主義を主張するものであるが必ずしも此は君主主義を意味しないこと勿論である。例へばラッサーレの如き、決して君主主義を高調するものではないのである。即ち國家主義と君主主義とは必しも同一視されないのである。

偖し乍ら我國の國家社會主義論者は何れも我國の皇室の意義を認め、我國の國体に基いて國家社會主義を行はんとする點に於て一致してゐるのである。而して資本主義経済制度は本来の日本國体に背反するものであると認め從つて資本主義と國体とを結付けんとする考へ方に極力反對するのである。但し日本主義皇室主義を説く内にも多少の二ユアンスは認められるのである。例へば津久井の如きは資本主義を打倒する事により日本國

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

体を解方し、國体の精華を発揮しようと説くが、
亦私の如きは斯る國体絶体主義は頑迷なる保守主義として之を
排斥してゐるのである。

以下其の説く所に付て見る。

(一) 高畠素之の所説

高畠は『國家社會主義大意』に於て次の如くに論じてゐる。

「國家の本質的機能が支配統制にありとするならば、國家として最も理想的なるものは此の支配の中心が一定不動に確立されてゐる事である。支配の中心が浮動的であることは支配權の円滑なる發動を妨げ國家の統一ある生長と發展とを障碍する。此の意味に於て日本の國体は眞に理想的であることを断言し得る。而して我皇室が國民との間に血族的親縁を保ち、且つ支配的中心たる地位を数千年に亘つて保持せられたる為に之に對する國民の感情は一種神秘化されたる崇敬と欣親とを含み外國に於ける君主と國民との関係とは本質的に異つてゐる。且つ我が皇室は現実的に常に我々の理想する摂取なき國家を以て政治の理想とせられ人民の經済的解放を常に衷心の願望とせられる。(中略) 斯の如く我が歴世の天皇が歴史的現実的に理想政治を意圖され実現されたと云ふ事は單に理論として支配の中心が不動である事が好ましいと云ふ國家主義の論據を更に十倍も百倍も有力に確証付けるものである。(中略) 我々は國家社會主義者たるの立場から當然日本國体の肯定者、禮讃者、擁護者、發揚者たる事を論理的に結論されるのである。」

即ち彼の國家論よりして日本國家も國家たる以上支配機能としての國家たる本質を有する。而して我が皇室は支配機能としての國家の本質を輝すべき為最理想的なるものであると見る。隨つて此の見地から日本國体を擁護し發揚しなければならないと結論するのである。

(二) 津久井龍雄の所説

津久井は現在國家社會主義を説く者の中で最も日本主義的色彩の強い者の一人である。

之は彼が最近「日本社會主義の同人」として生産党に入つた事に依つても明かである。

彼は『我等の運動に於ける若干の基礎概念』に於て「天皇は我等に取りてアルファでありオメガである。一切は天皇に出で、天皇に還る。それは我等に於て至高に正義の指標であり、仁愛の象徴であり就中強きが力のシンボルである。其は我等に取つて精神生活物質生活の両面に於て、なくてはならぬ神であり理想であり且つ最初にして最後の假定である。

天皇は論理的に是非ともなければならぬものが事実として存在するものである。論理と事実との神秘なる合一である。神秘ではあるが然し断じて空幻ではない。』と論じ、天皇を通じてのみ生きる氣持、天皇の中に生ころる氣持の中にのみ汎ゆる偉大な

るものを生み出す酵母が存し、其は單なる君主主義を超絶するものであると云つてゐる。

而して此の日本國体が日本主義の典型的具体化であるとし、日本主義は社會主義的精神と一致し日本主義を充分に生かす事が即ち社會主義の精神を充分に生かす事になるのだと云ふのである。何となれば、社會主義の精神は社會の爲已れを空しうする事であるが、社會の利害は複雑し社會は幾多の對立を有するから社會の爲と云ふ事に依り一の統一的なる正義の基準を確立する事は不可能である、所が此の点に於て日本主義は天皇と云ふ基準を立て一切の個人的なるものを之に没入するからである と云ふのである。彼の言葉を引用すれば「日本主義は此の点の認識に於て実に徹底してゐる。日本主義は各人の言行の最後的基準を最も具体的に確立した。天皇が其である。日本的言行は『天皇の御爲』が一切である。自己の一切を天皇の中に没却する。

日本主義は一切の個人的自由、個人的私欲、個人的所有を認めない。個人は悉く天皇の臣民であり土地財産は一切皇有である。普天の下、率土の濱、王土王臣に非るなしとはまさに文字通り日本に於てのみ見得られる事実である。（「日本的社會主義の提唱」十二頁）

（三）赤松克麿等の所説

赤松其他社會民主主義から國家社會主義に轉向せる者は（彼等は轉向に非ずして社會民衆党の精神の現実的發展であると説く）國家社會主義論者中最も皇室主義日本主義のニュアンスの薄い者である。例へば赤松は『日本の保守的なる國家主義者は日本の國家は神秘性を帯びてゐる、全く神ながらの國である。外國と全く違つた崇高なる傳統を持つた國であると謂つてゐる。（中略）日本の國家は特別神秘なる國ではない、そんなに外國に優れたる内容を持つてゐるものではない。唯日本の國家は日本の民族生活に必要なる民族文化國体である。此は決してブルジョアジーの独占物ではない、無産階級が天下を取つても依然として日本の國家と云へものは日本の民族の生存條件の確立に必要なるものである。然もそれは遠い將來に於ては漸次に世界國家に吸收さるべき動向を持つてゐるものである。』（「國民主義と社會主義」二十九頁）と云つてゐる。

併し乍ら本年一月十九日、二十日の社會民衆党全國大會に於て採擇せられたる『新運動方針要綱』は其の第一項として「日本の國体を尊重するの精神を一層明確にすること」を掲げ其の解説として「從來共產党は國体を無視して之が破壞を主張して來たが、社會民衆党は之に對して皇室は階級闘爭の外に超然として立つ國家の統制者であり民族的國家の代表者であり日本民族精神の表象である事を明にすること。」と云つてゐるのである。

且つ從來から社會民衆党は共產党が君主制の廢止をスローガンとするのに反對し、我國特殊の客觀的狀勢に立脚して現実主

義を取るべき事を主張して、積極的に皇室中心主義に出でない迄も、皇室廢止を主張する事は我國獨特の事情を認識せざる直譯的暴論であるとして之を駁擊してゐたのである。

從つて上述せる赤松の所論は寧ろ單に反動的國粹主義に反對する趣旨であると解すべく、新運動方針に就て見得るが如くに、他の國家社會主義者と同樣に日本の國体を認識し尊重するものであると見做して差支へないと思はれる。

五、土地賤產（生產權）奉還論

國家社會主義は反資本主義を標榜し、生產機關の國有（津久井は一切の公共的事業の公營又は國營、重要大規模企業の國營。私營企業の規模限定と其の統制。私有賤產制度の制限と超過額の國庫編入。農耕地の國有、耕作權の確立を主張してゐる。）に依る社會主義經濟制度の建設を目標とする。而して其の反資本主義の根據を他の社會主義と同樣に資本主義社會に於ける無產者の悲慘なる生活狀態、大資本の兼併による富の偏在的集中等の資本主義制度の諸弊害の一掃に求むると同時に、一切の者は天皇に屬すると云ふ所謂皇有主義の思想より資本主義及び其の經濟組織の基礎たる私有賤產制度は日本の國体に反するとの理由から資本主義打倒を叫ぶのである。

而して今日資本家が各々其の有する企業に依りて割據し利潤を追究して無政府的狀態に於て鬪爭しつつあるは、明治維新前

に於て封建諸侯が土地人民を私有して政治を行ひ居たりしに同じと爲し、大化改新、明治維新に倣ひて土地及び生産權を天皇に奉還すべしと主張するのである。

「元來文字通りの私有私財の觀念は我が國體下に於ては絶對に許さるべきではない。一切は天皇の有である。普天の下、率土の濱あげて天皇の有である。前言せる天皇を通じて天皇の中に生きる我々の氣持は、斷じて私有利己的氣持と両立し得るものではない。徹底利己主義を其の根本の枢軸とし、貧婪飽くなき利潤の追究に、同胞を忘れ國家を潰す資本主義制度は我が國體の絶對に排撃するところでなければならぬ。一切を挙げて天皇へ、資本家は其の持てる資本を、地主は其持てる土地を。此の土地生産權及び財産の天皇への奉還と云ふ思想は、既に大正七八年頃雑誌『國家社會主義』を發行せる遠藤無水が其著『財産奉還論』に於て示してるるもので、彼は当時露西亞革命

の影響を受けて我國に於ても過激思想が漸く勢力を得んとし且つ米騒動の勃發等に依り人心の動搖するに至つたのを見て、此に對する方策は明治維新に倣ひ資本家地主をして其の財産を奉還せしむる他なしと主張したのである。

最近、又彼の系統に屬し、同樣に無政府主義より國家主義に轉向せる長澤九一郎は『生産權奉還—日本主義労働運動の基本認識』なるパンフレットを出して同樣の思想を表明してるる。此は嚴密に云つて國家社會主義の範疇に入るものとは云ひ難いが、參考迄に其の開陳する所を見る事にする。

彼の云ふ所に依れば明治維新の歴史には「富國強兵の標語に基し資本主義の無批判的攝取」と「神武への復古を國是とする天皇御親政」の二つの潮流があり、維新の指導者たりし下級武士階級は維新の根本精神たる後者の潮流、「君民一家の集團生活を実践行事とする、即ち公地公民公有の國体原理に基く一君万民政体の

倫理的規範」を充分に認識せずして、当時勃興せんとするブルジョアジーと結んで極端なる保護助長政策を取り、今日に於て見る如き資本主義の經濟的封建制の確立を來したのであり、生産権の奉還は維新元勲の誤謬を訂し維新の精神を徹底する事であると云ふのである。

「生産権の奉還とは、明治維新に於ける『版籍奉還』の上表に明記されし『臣等居る所は即ち天子の土、臣等牧する所は即ち天子の民なり安んぞ私有すべけんや』の徹底だ。それは維新元勲の失敗を尻拭ひする『御國』の大掃除であり、且つ又維新その ものの徹底だ。それが我が日本に於ける プロレタリアの歴史的使命だ。

全日本の労働者諸君 過去に於ける非日本的なる直譯運動の誤謬を深く清算せよ。而して皇民プロレタリア意識に奮起せよ。

然らば錦旗は我等の頭上に燦爛として靡り我等の行手を限りなき光明へと導くであらう。進め一國一家族の國体經濟制度建設へ」。（『生産権奉還』七十五頁）

彼は斯の如く生産権奉還を強調して叫ぶが具体的に如何にして所謂奉還を行ふべきかに就ては説く所がないのである。又其用語等より見て里見岸雄の『國体科学』の影響大なるものと見る事を得る。

雑誌『急進』昭和五年九月号には津久井龍雄が『日本主義者の闘争を財産奉還運動に集中せよ』と題して、此の思想を展開してゐる。

上述せる如く彼は資本主義は我が國体と相容れざるものであると主張するもので、勿論其の奉還論は此處に出發するものである。即ち「大化改新、明治維新に於て行はれた土地奉還、版籍奉還といふやうな事は一切を本來皇有と觀じ一時私有してゐたのは假に暫く之を頂つてゐたのだと云ふ意識からの為されし得

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

るものだ。私有の原則的に許されてゐるところに奉還などと云ふ觀念と行爲とが現はれる筈は絶對ない」（前掲「提唱」十二頁）と云ふのである。

扨て、此の所説に於て先づ現在の金融資本側覇の下に民衆が苦惱する客觀的状勢に於て、國家社會主義者は其の運動に於てあらゆるエネルギーを財産奉還の一點に集中すべき時機に在るとなしてゐる。

而して「一切を擧げて天皇へ、資本家は其の強有せる富を、地主は其の壟斷せる土地を」

「一切の私有的觀念と独占的制度を排撃せよ」

「全國の日本主義者よ、其の闘争を財産奉還運動に集中統一せよ」等のスローガンを掲げ、此の運動は如何なる點より見るも合理的合法的大義名分的であり且つ之に依りて今日の社會的不正の根本的に解決し得る唯一の途であると結論してゐる。

彼が此運動の具体的方針として謂く所は次のごとくである。

一、一切の所有を天皇に奉還する運動であり、檄文、演説其の他の方法で全國的に同志の署名を募り之を請願令其他の方法で天聽に達する。

二、天皇大權の発動に依り富豪貴族資本家の所有を悉く收奪すべき事を可能なる一切の手段を以て奏請する。

三、資本家地主政府が之の運動に對して彈壓を加ふる時は、凡ゆる部面に於て決死的闘争を敢行し、國内に於ける二階級の對立を國民の前に明にし、彼等が如何に不忠不義の國賊であるかを國民に印象せしむる事に努力する。

而して此運動には、單に財産奉還の意志表示を爲せばよいのであるから總ての階級職業を通じて國民大衆が參加し得るし、尚自己の財産を自ら進んで奉還せんとするのであるから之を單純に私有財産否定として治安維持法を以て處罰し得ないのであ

ると主張する。

此は單なる生産權の奉還ではなく、一切の私有財産の奉還であるから、始に記した彼の主張する經濟政策が私有財産の制限、大企業の國有を主張してゐるのとは多少矛盾してゐる、且つ『日本的社會主義の提唱』に於て財産奉還論に導くべき思想は示してゐるが財産奉還を明瞭に主張してゐないのと對應して考へると、彼の思想に多少の變遷が此の論文發表後あつたのかと思はれる。

次に社民党内より唱へらるる産業奉還論に就て見る。

社民党にて先づ産業奉還論を主唱せるは安倍磯雄であり、安倍磯雄が此を明確に表明せるは昭和二年春であるといふ事である。去る一月の社民党第六回大會に於ても彼は開会劈頭産業奉還を說き、又『労働經濟』二月號に産業奉還論を發表してゐる。尚松岡駒吉も同樣の意見を先般の總選挙に際し立候補するに當り發表した。

安倍磯雄始め社民党内に此の思想が起つたのは、彼等が從來社會民主主義の立場から議会主義を取つて其の理想實現を期してゐたのが、漸く議会主義のみで目的を達せんとする事が不可能であると考ふるに至り、然も餘迫暴力革命反対を固執する所から産業奉還と云ふ事に想到したのであると推測する事が出來る。此は『労働經濟』の二月號が巻頭に「我社の理想」として次の如く述べてゐるのを見ても解る。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

「吾人の日常の信條よりすれば資本主義産業制度の改革は原則として飽迄平和的でなければならない。吾人の排撃するは制度であつて人ではない。世上往々にして暴力を社會改革の不可的手段と考へ暴力其物を讃美せんとする傾あるは吾人の同意し得ざる所である。今日我國民生活の困窮を眼のあたり見る者が切迫せる心情となるは當然である。然しながら吾人は今尚國民經濟が資本主義を揚棄し社會主義計画經済を採用するに平和的手段ありと信ずるものである。此手段は急進的なるも平和的且つ建設的である。即ち安倍先生が巻頭に主張されてゐる産業奉還の一途である。」

安倍磯雄は凡ゆる産業を國家統制の下に置くには先づ國家に之を移さねばならぬが、國家が産業を買收する事は実際上不可能である、併し日本に於ては凡て天皇に屬すると云ふ精神の發露たる明治維新と云ふ良き先例があるから此に倣ひ此の難問

を解決する事が出來ると云ふ立場から産業奉還を主張するのである。

「今や我國は再び維新当時以上の災難に遭遇してゐる。此が打開策は先づ金力大名たる資本家が其の占領して居る重要産業即ち水力電氣事業、製糖事業、鑛山事業、造船事業、製鉄事業、運輸事業、植林事業、漁業は勿論銀行業、保險事業、百貨店事業の如きを奉還して之を國家管理に移すにある。言ふ迄もなく立地は何ものよりも先きに奉還すべきものである事を附言して置く。」

尚彼が財産を資本財産と消費財産とに分ち「私共の主張は資本財産だけを全部天皇陛下に奉還して消費財産は依然として私共の所有とすべしといふのだから」私有財産制度を否定するものではないと云つて居るのも、彼の合法主義を表はすものとして注目に値する。

六、反國際主義

國家社會主義は國家主義の立場から國際主義に對しては對蹠的なる立場にある。從來所謂日本主義を主張し來りて現在國家社會主義に轉向したる者が國際主義に反對なるは勿論であり、彼等は特に共産党が第三インターナショナルに加盟しプロレタリア的國際主義を奉じてモスコウの指導下に反國家的行動を爲す事に對して強く反対し、又國際聯盟軍縮會議等の所謂國際協調主義に対しても此を英米に屈伏するブルジョア國際主義であるとして反対する。

社會民主主義より國家社會主義に轉化せるものは、社會主義運動は各々其の國の特別なる事情に適應して行はなければならぬとして、日本の特殊なる客觀的状勢に就て全然無智なるコンミンテルンの劃一的なる指導の下に直譯的な盲動を行ふ共産党の態度を否定し且つ、反國際主義を根據付ける重要なる一とし

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

て、革命後のロシアに於てトロツキイの國際主義的なる世界革命論が敗れ、スターリンの一國社會主義建設論が勝を得て、目下其が五ケ年計劃に於て着々実施せられてゐる事を援用し、先づ國家的規模に於て社會主義を実現する意味に於て反國際主義を主張するのである。

現在迄の所、此の種の反國際主義に就て、最も多く説いて居り、又最も理論的に之を構成してゐるのは赤松克麿である。

現に本年一月の社會民衆党大會に於て可決されたる所の、彼の見解を多分に表はしてゐる『新運動方針要綱』に於ても、「現下の熾烈なる民族闘爭の世界状勢下に於て、國民的利害関係を無視し、全世界の無産階級の共同利益のみを高調し、且つ其機械的劃一的國際闘爭を企図するマルクス主義的國際主義は空想的誤謬なる事を明にし、無産階級の國民的立場を明確化した上で、最も現実的なる國際主義を採ること」を主張してゐる。

彼の所謂『現実的國際主義』の基本的論旨たるは次の如くである。

(1) 將來に於て終極的には人類の世界的結合が成立する事が理想である事は認めるが、其は遠き未來の事に屬し、現在に於ては先づ社會主義を一國内の規模に於て実現し、社會主義國相互間の民族闘爭を經て進まなければならないと云ふ認識の上に立つ。

(2) マルクスの國際主義は自由主義經済の全盛時代に説いたものので、世界各國は漸次全面的依存と全面的交易とに依つて單一世界經済に移行するとの誤れる認識の上に立てるものである。然るに二十世紀に入りて世界は國民經済の対立する独占的帝國主義時代となり、各國は経済的障壁を高くして相爭ふ状態となり、各國の無産階級の利益は益々相対立し、『萬國の労働者よ團結せよ』のスローガンは客觀的状勢に反するに至つた。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

(3) 人類の歴史は階級闘爭並に民族闘爭の歴史である。世界平和は此の両闘爭の綜合的闘爭に依り得らるべく、先づ國内に社會主義を実現し且つ民族闘爭に依りブルジョア的民族をして其の特權的独占的地位を抛棄せしむべきである。

(4) 現実的國際主義は必ずしも國際的結合を排せず、上述の目的を達成する爲プロレタリア的民族は協力して廣大なる資源を擁する國に對立して民族闘爭を行ふべきである。

次に彼の所説を引用しつゝ稍詳細に説明する。彼はパンフレット『國民主義と社會主義』二三頁に於て併し乍ら其處に重要な事は我々が國家絶對主義でないことである。今日の日本が永久に續くとは思はない、我々は矢張將來各國が社會主義國家となり、世界が今の國際聯盟の如きものに發達して、其の國際聯盟に漸次各國家の權力が集中して、終には各國が丁度同じ統制力の下に立つ行政区劃の樣な状態になると思ふ。併し吾々此は遥か彼方の人類文化の理想として豫想し得る事で、日本が社會主義國家となり、續いて全世界が社會主義國家となつたとしても其当座に於て直ぐ斯る状態が來るとは思つてゐない。」と云ひ又、『國民社會主義とインターナショナル』（『日本社會主義』二月号二十頁）に於て、「プロレタリアの國際的對立を認識し、此に立脚して世界政策を決定することが、絶對的にプロレタリアートの國際協力を否認し、一國プロレタリアートを國際的孤立の危険に陥ることとならない。—中略—我々もブルジョア國家と同じやうに、プロレタリアートの國際的對立を認識し乍らも國際的協力を爲す可能性がある。此處に國民社會主義の現実的インターナショナリズムがある。」と云つてゐる。

更に彼がマルクス・エンゲルス及びレーニンの國際社會主義の現在に於ける非現実性を主張する論據に付いて見る。

第一は彼が國家絶對主義ではないと云ひ乍らも國家に就ては

他の國家社會主義者と同樣其の本質を統制機能に存するとし資本主義滅絶後の國家の存在を否認するマルクス主義的國家觀に反対する事である。

第二に上述せる如くマルクスの時代は自由主義經濟時代であり其の世界經濟に關する認識は獨占的資本主義以前の資本主義を對象として居る。共產黨宣言に於ても「一國の內部に於ける階級對立が無くなれば、國民と國民との敵視も亦なくなるであらう」と云つてゐる如くマルクスに取つては實際一國社會主義の實現と國際社會主義の實現とは同時性を有するものであり且其は自由主義經濟の極致として世界經濟が單一的有機的構成となり一國の經濟は完全に其の獨立性を喪失して單一世界經濟の有機的一部分と化してしまうたらうとの前提の上に立つたものである。

所がマルクスの豫想と異る方向に世界經濟は進展し「資本主義は自ら獨占主義へ發展した。自由貿易主義は保護貿易主義となり、門戶開放主義は門戶閉鎖主義となり、國際的自由競爭主義は國家的獨占主義となり、世界平和主義は武力對立主義となつた。國際的分業に基く單一的世界經濟は、自給自足的經濟の方向へ進んで來た。獨占資本主義時代に入つたとしても一方に於て國際協調の潮流を見出し得るけれども、現下の世界經濟の本体を見究めるならば、國際協調は一面的潮流であつて決して主流ではない。主流は國際對立である。

ブルジョアインターナショナルは破壞された。然らば萬國のプロレタリアは如何なる立場に置かれたか。優勝國民のプロレタリアは（高き生活水準を獲得し、弱小國民のプロレタリアは低き生活水準を押しつけられた。）そこでプロレタリアが國境を越える自由は奪はれた。彼等が祖國意識を清算して、世界市民たる事は許されなくなつた。アメリカのプロレタリアは日本のプロレタリアの移入を拒否し、且つ既往の日本プロレ

タリに対して民族的差別待遇を強要した。比處に於て萬國のプロレタリアを貫く横斷的なる連帶意識は必然的に稀薄化せざるを得なくなつた。」（『國際社會主義に於ける空想主義と現実主義』（日本社會主義、十二月六頁）

扨てレーニン主義は帝國主義時代に於けるマルクス主義であると云はれるものであつて、即ちマルクスが自由主義經濟時代に構成せる理論を独占的帝國主義時代に於て發展せしめたものである。

赤松はレーニンが『評論の摘要』に於て

『資本主義の發達は民族運動に於て二つの傾向を表示する。第一は民族生活と民族運動の覚醒、総ての民族圧迫に対する闘爭民族國家の建設である。第二には民族間の諸関係の發達と複雑化、民族間の障壁破壊、經濟生活、政治、科学等々の世界的資本的均一化の建設である。両主義共資本主義の世界的原則であ

る。前者は資本主義の初期に於て優勢であり、後者は資本主義が社會主義に轉化するその成熟を表徴するものである。』と云つてゐるのを引用して「レーニンによれば資本主義が成熟すれば、民族間の関係が複雑化して、民族間の障壁が撤廃され、政治經濟科学等々の文化現象が世界的に均一化されるが故に、其處に來るべき社會主義社會の基礎たるべき統一的世界經濟が着々準備されつつあるといふのだ。だから資本主義を打倒しさへすれば、直ちに統一的世界經濟が容易に展開されてくることになる。

我々は其處にいとも安價なる楽觀主義を見出すことになる。」（『日本社會主義』十一月号八頁）と主張し更に資本主義さへ顛覆すれば後に問題はない。其の後には直ちに民族融合の世界平和が輝いてくる。と云ふのがレーニンの認識であるが、此の認識はマルクスの認識を一歩もあないものだ。從つてマルクスの唱へた『萬國プロレタリア團結せよ』と云ふスローガンをレーニ

ンが其儘継承し、このスローガンに基いてコミンテルンが結成されたのも不思議はない」と云つてゐる。

従つて又此に関聯して社會民主主義及びレーニン主義を各々其の指導精神とする第二及び第三インターナショナルに付ては、共に之を空想的なるものとして排斥してゐる。

第二インターナショナルに関しては（雑誌『日本社會主義』二月號）世界資本主義が没落の過程を辿りつつある時第二インターナショナルは益々無力化せりとして、『第二インターナショナルは何が故に無力化したか、それは彼が理想と現実との救ひ難き矛盾に陥つたからである。彼はプロレタリアートの國際的協力を高調する、しかしそれは理想として考へ得る事であつて現実的根據を欠いてゐる。各國の國際的利害が必ずしも一致せず、プロレタリアートが終局の世界平和に至る迄は國際闘争の運命下に置かれてゐる以上、効果的なる國際協力は至難なる状態に

立つてゐる。空想を現実に求めんとする時其處に矛盾が起り破産を生ずる。第二インターナシナルの煩悶は此處から發生する』。

と論じてゐる。

且つ一部社會民主主義者の『國民社會主義は世界プロレタリアートの協力を無視してゐる、國際的孤立の危險をもたらすものである』と云ふ反対論に對しては「若し萬國のプロレタリアートの間に共通した利害が存在する具体的根據があるならば、第二インターナショナルは輝しき發展を遂げたはずだ。世界経済の動向が益々萬國のプロレタリアートの利害関係を對立化せしめつつあるとき萬國プロレタリアートの國際協力を信じて第二インターナショナルを支持する事は魂の去つた遺骸を空しく守護するやうなものだ。」と反駁してゐる。

第三インターナショナルに就ては其が赤色帝國主義とも云ふべきもので、其の部分的実現とも見るべき『ソヴエート聯邦』

に於ては民族の平等と主権、自決の自由に対する各民族の権利、民族及び民族的宗教の有する特権及び制限の廃止、少数民族及び人類学的グループの自由なる發達を声明（一九一七年十一月ロシア各民族の権利に関する声明）しから、現在、事実に於て各民族の自由平等なる結合は形式的にのみ認められ実際上ソヴエート聯邦はロシア民族支配下の單一國家であり且つ一個の國家統制機構であり、更らにせ界的にソヴエート聯邦を作らんとする爲の機関たるコミンテルンは隨つて、ロシアの資金とテーゼと武力を以てする赤色帝國主義の機関たるに他ならざるものであるとなし、現在迄のコミンテルンの西欧、近東、極東に於ける失敗を列擧して次の如くに結論してゐる。

「若しサウエート・ロシアの赤色帝國主義が世界的に成功するものと假定すれば、ロシアの権力下に容易に單一世界経済が生れ、從つて國民的段階を經ずして、世界社會主義が実現するであ

らうことが推定され得る。しかし斯の如き世界社會主義が各民族の合意、自由、信頼に基くインターナショナルでないことはいい迄もない。それは飽迄も大ロシア主義の実現である。ところで大ロシア主義は、今日サウエート聯邦及び外蒙古に於て部分的実現を示してゐるが、これが果して世界的に順調なる進展を示し得るや否やは大に疑問である。むしろそれは不可能であると私は信ずる。―中略―共産主義インターナショナルを空想的インターナショナリズムと云ふ所以は此處にある。空想的インターナショナリズムに對立するものは現実的インターナショナリズムである。現実的インターナショナリズムは各國民の自主的社會革命即ち國民社會主義の段階を必然的に經過しての國際社會主義である。」と。

且つ五ヶ年計畫等に現はれたるスターリンの一國社會主義建設論は事実上コミンテルン本來の指導精神に反するものである

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

が、國民經濟の對立と云ふ客觀的狀勢に餘儀なくされて他國のプロレタリアでなく自國の農民と結ぶに至つたもので、以て國民社會主義の正しさを証明するものであると云つてゐる。

以上で彼の先づ一國に於て社會主義を建設すべしとなし、又社會主義實現後も國民經濟の對立を認むる事の論據を訊ねて來たが、最後に彼の屢々云ふ現實的インターナショナリズムとは何かと云ふ事を見よう。

『國民社會主義とインターナショナル』の末尾に於て次の如く述べてゐる。

「現實的インターナショナリズムは、萬國のプロレタリアートが、プロレタリアートなるが故に國際的協力を爲し得ると云ふが如き劃一的なるインターナショナリズムを排する。我々は萬國のプロレタリアートの間に於ても利害の不一致を認め從つて彼等の民族鬪爭を認める。併し此民族鬪爭戰線に於て凡の民族が相互に利害相反してゐる譯ではない。具体的に云へば生活水準の低い民族は強大民族との對立關係に於て共同利害を感ずる立場にある。（中畧）資源、市場、勞働力が世界的に管理統制され諸民族が計畫的單一經濟に入る迄は民族鬪爭は續くのである。劣弱なる諸民族が共同戰線を張つて強大民族の独占的權益の放棄のために鬪爭し諸民族の生活水準の世界的平均化を促進する指導精神が現實的インターナショナリズムである。」

赤松の現實的國際主義に付ては大要上述の如くであるが、津久井龍雄は一切のインターナショナルは外國本位のものであるから此を排斥すべしとして、日本は進んで國体の發揚國家正義の發現により世界進出を圖り日本中心の第四インターナショナルを起すべしと云つてゐる。（『日本的社會主義の提唱』五六頁参照）

以上の如く國家社會主義の反國際主義論は概して、階級闘爭と民族闘爭の併行、國際主義の非現実性、社會主義の一國内建設の先決問題なること等を説き、劣少民族の強大民族に對する團結を強調するものであつて、後述の滿州問題、大アジア主義と関聯するものである。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

昭和七年三月

河合栄治郎執筆

國家社會主義擡頭之由來

帝國大學新聞 自 才四二号 至 才四二四号

秘 警保局 保安課

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

国家社會主義擡頭の由来

一、

赤松克麿氏によりて提唱された国家社會主義は理論上多くの弱点を有するに拘らず日本の社會運動に相當の勢力を揮ふであらうと私は思ふ。それを好むと好まざると問はずその重要性だけは打算のうちに置かねばならない。では何故に国家社會主義にかゝる牽引性があるかを明かにする一つの方法はその起頭の由来を明かにすることにある。

これに先だつて私は国家社會主義が現今日本の社會思想界に於いていかなる特異性を持つかを一瞥する必要がある。それは国家主義と社會主義との結合でありその正面に対立するものが二つある。一つは資本主義のイデオロギーとしての自由主義であり、一つはマルクス主義である。国家社會主義が自由主義と対立する点は三つある。第一は自由主義の擁護する私有財産制度と

自由競争制度とに反対し第二に自由主義が基礎とする個人主義の社會哲学に反対し第三に自由主義の政治上に現はれた議會主義に反対する。それがマルクス主義に対立する点は二つある。第一はマルクス主義の国家死滅説に反対し第二にマルクス主義の国際主義に反対する。もしそれが筆者の立つ理想主義的社會民主主義との対立点を求めれば第一にそれは国家至上主義をとることに於いて私共の理想主義的個人主義に反対し第二に侵略主義をとることに於いて私共の平和主義に反対し第三に暴力革命主義と独裁主義をとることに於いて私共の言論自由主義と議會主義とに反対する。

それが思想界の分野に於いてかゝる特異性を有する国家社會主義は其の成生の跡を尋ぬれば国家社會主義が反資本主義の色彩を明かにすることにより社會主義に近接し社會主義がマルクス主義より離脱したことにより国家主義に歩みよりかくして両者

の結合が可能にされた。この結合の割合よりみれば国家主義が主にして社會主義が従であり又私共が国家社會主義に反対する根據があり又そこにこの思想が日本に於いて勢力を持つ理由があるのである。

二

然らば国家社會主義は何故に日本の大衆を牽引する魅力を持つかそれは国家主義が日本人の間に牢乎不拔の傳統的勢力を有するからである。ある国に於いて国家主義が主要潮流となるか否かは其の国の対外関係に左右されることが多い。今日本の明治以来の対外関係を回顧するに凡そ三期の段階を區畫することが出来ると思ふ。

第一期は日本が外国からの不平等の待遇を排除せんとした時代である。日本の独立に対する外国の脅威は明治の初期に於て絶頂ではなかつた。其の後に於ては治外法權の撤廃と関税自主

権の確立とは日本を外国と対等の地位に置く表徴として当時の全日本の進路の標的であつた。この時代は大体明治二十年代の初期まで継続するが明治四十一年の條約改正は時代に於いては第二期に属するが第一期の時代の要望の結果をつけたものと見るべきである。

第二期は前期に於いて日本が独立を確保したものゝ日本の隣接国に対する外国の侵略に対抗して間接に日本の独立を確実化せしめんとした時代である。これが明治二十年代から三十年代を通じた時代であり朝鮮を対象として始めは支那と後には露シアと対立し日清日露の両戦役に於て其の目的を達したのである。

此の両戦役は結果に於て日本の産業の発展を促進したことは顕著であるが一部の学者の言ふが如く日本の帝国主義戦争と目すべきではない。当時戦争のふん囲気に生活した何人もの経験する如くこの時に於て日本の独立は間接ではあるがかなりの脅威を受けてゐたことに及ぼす防衛的の意義を持つものと観察すべきである。

第三期に於て日本は従前と全く異る時代にいる。此の時代に於いては直接にも間接にも独立は確保され防衛から攻勢へ消極から積極へと変化し意識的に小日本から大日本へとぼう張の政策をとつた。朝鮮の併合と満蒙への進出はこの政策の実現であり今に至るも継続の半途にある。固より満蒙の進出も日本の自己防衛といふ根據から説明が企てられるかも知れない。然し少くとも其の緊急さに於いて前二期と劃然たる区別がなされねばならない。明治の末期から日本は第三期に入ると共に全く新たなる対外関係に足を踏み入れたのである。

三

対外関係の三階段に伴うて国家主義にも消長があつた。第一期と第二期とに於て日本国民は外国の脅威と汚辱とに暴露され

てゐた。それを排除することは個人の成長の為にも欠くべからざる條件であつた。然してそれを排除する方法は唯個人が結合することによりてのみ可能であつた。かゝる狀勢の下に於いては国家といふ統一体と個人とは二にして一であつた。国家か個人かといふ二者擇一が問題とならざる程に両者を区別すること が出来なかつた。此の時代に育つたものは當時いかに国を挙げて国家の為に奉仕したか国家の手段となる事により個人が生きると考へたかを今も鮮かに記憶するであらう。筆者も此のふん囲気の中に育てられたのであるが當時の国家主義の横溢は現代の青年の到底夢想だもすることの出来ない程であつた。かくて今日三十年代の後半以上の年令の人々には国家主義は抜くべからざる根柢を持つ。唯思蒙の修練によりてのみそれより離脱することが可能であつた。

たが第三期に入ると共に事情は自ら異らざるを得なかつた。

対外関係が一段落を遂げると共に国民の眼は外より内へと轉じ国家の独立と名誉とから国民生活の充実へと推移した。国家なる統一体に吸収し盡されたる個人が漸く自らの地位を自覚して国家と個人との分化を生じたのはこの時である。文藝界に於ける自然主義や人道主義哲学界に於ける理想主義経済学界に於ける社會政策学派政治学界に於ける民主々義、社會思想界に於けるサンジカリスム、ギルド・ソシアリズム、マルキシズムの抬頭はその各々が対立矛盾するに拘らず等しく国家主義の衰頽に乗じたる潮流である。一言にしていへば第三期に於いて價値の究極は国家より個人へと轉化した。

明治天皇の崩御に際して「ロンドン・タイムス」の特派員が天皇の崩御と共に日本は一轉機に来た今までは日本の勃興の時期であつた。今や日本の運命は下り坂であると言つたのはかくとも国家主義への熱狂のてう落を指示した点に於いては肯綮を得た観

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

察である。

四

然し明治の治世四十年を持續して根底深く植ゑられた国家主義が一朝にして根絶するはずがない。それのみでなく支配階級が教育政策の根本として国家主義を鼓吹しだしたのは此の時期からである。前期に於ける国家主義は求めずして成立した。その意味に於て自然発生的であつた。然るに第三期に於いては意識的にそれを教育の指導原理とした。国家主義の権威が降下し始めた時にそれの教育が治発になつたのは異様の知くであるが必ずしもさうではない。凡ある思想を意識的に鼓吹することは反対思想の対立を意識した時が自己の思想の轉換を自覚した時だからである。斯くて小学、中学の教壇から社会教育の演壇から国家主義は教授され在郷軍人の結成と青年団の設立とにより組織され社会化された。

第三期に於て国家主義への懐疑の門は開かれたものゝそれが大地に着いた個人主義を生まざるうちに国家主義の積極的教育が開始されたのである。二十年代と三十年代の青年も彼等の先輩と等しく二の思想的ふん囲気の中に育てられそれから離脱することは彼自ら思想の道程をたどつた唯少数のものゝみ可能である。かくて国家主義は揺らんの中で開きほれた子守歌の知くに日本国民のすべてに追慕される懐かしい神秘の世界である。

五

だが此に次問があるかも知れない。たとへ国家主義は以上の知くに根帯が深からうとも日本にも資本主義は発展した。さすれはそれを貫く自由放任主義と更にその基礎としての個人主義が侵入したはずである。果して然らばそれは国家主義と正面衝突して何等かの痕跡を残したに違ひないと。これに答へるが

ために私は日本の資本主義発達の特異性を語らねばならない。

もし英国の資本主義を以て発達の常則的のものと見做すなら

ば日本及ドイツのそれは変則の径路を辿り来つた。英国に於いては資本主義に先だつて封建社会崩壊の後に現れた近代国家の成立があつた。しかして其の国家は政治上に於いては開明専制主義を経済上に於ては重商主義をとつた。資本主義は重商主義を敵として勃興し国家(政府と言ふ意味に於ける)の干渉保護を排して個人の生活を忍にすることを目標とした。従つて資本主義と自由放任主義と夜警国家観とは分離すべからざる一体を形成した。

然るに日本に於いては明治維新と共に近代国家の成立した時に先進国が既に資本主義を完成してゐたために、これと対抗の目的を以て政府が指導率先して資本主義完成の役割を努めざるを得なかつた。

こゝに於いて日本の資本主義は開明専制的の国家と重商主義の国家とに対立するに非ずして国家の開明専制と重商主義とを久くべからざる條件としてのみ発達することを得たのである。

なるほど国會開設を眼前に控へた時即ち明治十三四年頃官有財産の拂下官営事業の民営移化等のことあつて一時自由放任主義の実現外観がないでもなかつた。然しそれは瞬間に止つて明治の初年採られた重商主義は持續されて現代に及んだ。造船奬勵法、航路補助法、保護関税の実施の如きはその最も顕著なるものであるがいまだプロレタリアの始と要望なき時に於て工場法の実施されたるが如き又以て當時の思潮をうかゞふに足るだらう。

これを要するに日本には自由放任主義の活躍した時代はなかつた。英国に於ける重商主義が一旦解消して自由放任主義に代られやがて再重商主義に移つたのと反対に日本では自由放任主義を省略して重商主義に終始して来た。これけだし日本の資本

主義が日本の国家の維持と発展との要具として扱はれたからで
それは国家主義の羽翼の下に温められて成長した。その限りに
於いて日本に於いては資本主義のイデオロギーとしての個人主
義と其の表現としての自由放任主義とは唯国家主義の許容する
わく内に於てのみ歪曲されて移植されたのである。
それが国家主義を批判し克服するが如きけだし思ひも及ばざ
る事であり得ない。
更に又問がある。かも知れない日本に於いても明治二十三年の
憲法発布と共に勅令公論に決するが為に議会制度が設けられ言
論集会結社等の自由が認められた。これは自由民権の思想の普
及した結果ではないか、然らばこれは国家主義の経営を崩すこと
にはならなかつたのかと。なるほど明治十年前後に於いてルソー
モンテスキユーやペンサム、ミル、スペンサーの文献が
邦訳され自由民権の思想の輸入されたことは事実であるが遂

ながら議会制度は上より與へられたもので民衆の胸奥より溢れ
出た自由主義の結晶ではなかつた。
私見に依れば明治十年、二十年代に於いて明治政府の要望は如
何に先進国と対等の地位に立ち不平等條約の改正を為すかといい
ま唯一点に集注した。民衆の要望に比例せざる教育制度、法律制
度、産業制度を遠く早く施行したのは実にこれがために外ならない。
今に至るまで我が国の文物制度が外形の整へるに拘らず国民
の内的準備と照應を欠くはその原因がこゝにある。議会制度を
布きたるも又この政策の現れに過ぎない。
国家主義と対立する個人主義の基礎の上にのみ立つべき議会
制度は奇怪にも国家主義の見地よりして承認されたのである。
自由党や改進党の先輩の如き見識をば私は軽視するのでは
ないが然し彼等の抗争が余りに激烈に至らざる内に憲法が布か
れたのも国家の平和統一を目指する国家主義に根據してゐつ
(7)

た。かくして成立した議會制度は今日に至つても民衆の議會主義的確信の上には立脚してはゐないし、又国家主義と対抗し及拠する何物でもない。今一つ附記すべきことは日本の議會が藩閥に対抗する権力争奪の目的を持つたと言ふことである。一七八九年のフランス革命や一六八九年の英国革命又は一八三二年の選擧法改正は第三階級の要望により実現された。たとへ第三階級は後に第四階級を裏切つたとはいへ少くとも當初に於ては「第三階級とは何ぞや」と問はれて「それは今何物にも非ずされどやがて一切たるべきものなり」と言ふに値する程いやしくも人格價値を自覚せるものたる限りはそれ一切の人の普遍的原理を負担してゐた。議會の設立は民衆の胸奥の琴線に觸れる程社會進化の一轉機であつた。

だが日本に於ける議會は藩長出身者の組織する政府に対抗して権力の分配に與からんとする運動の結果であつた。その運動の成功に不必要なる限り全民衆の個人人格の権威に新ふることをしなかつた。藩長に対する土肥の出身者を首領とする政党は余りにも地方的であり封建的であり権力争奪の露骨なる表現であつた。それはブルジョア革命といふに値するには余りにもブルジョア前の運動である。現今の政党が吾々の面前に演ずる醜体は必ずしも我へられた傳統を唯踏襲するに過ぎないのである。

斯くて国家主義は自己に対立し及抗する障害に逢着することなしに守国不拔の勢力として日本国民の心理にこゝに着した。ふたゝび それは単に無意識的たるに止まると、無意識的であり潜在的たるほどに国民の脳裡に深く沈澱してゐるのだ。もし人あつて之に點火するものあらんか無意識が意識となり潜在が顕在とならないとはたれが保證し得ようか。

七

それでは最近に於いて国家主義を潜在より顕在たらしめた原

四ともいふべきものは何か私は次の各個のものを挙げることが出来ると思ふ。

第一はロンドン軍縮條約に関する一連の事件である。大亜洋艦や潜水艦の縮少が国防を危くするものと考へられ、それ自体として国家主義を利載したのみならずこの軍縮條約は統帥権干犯や政府と軍部との争ひ、ひき等の諸問題を惹起したがそのいづれもが軍部、国防、国家主義といふ必然の聯関を伴ふものであつた。軍縮問題は直接には海軍々人のみの関心事たるかの如くに見えるが実は国家主義宣伝の好題目であり国家主義を国民一般に喚起するに充分であつた。

第二はいはゆる幣原外交に対する及感である。国際協調を基調とする幣原外交と国家主義とは本来対蹠的に立つ一方の失敗は当然に他方の抬頭を招来する。一般には幣原外交が妥当だと考へられても対手国が支那であり、問題が満蒙権益の確保にある時に、この外交はやもすれば批判を受けやすい。殊に幣原外交の欠点は正当なる主張を為す場合にも断乎たる態度を欠ぎたるにある。この点に対する不満が一般的にも幣原外交への不信を醸した。

第三は議会に対する失望である。一方に政党内閣制度が漸く確立したと同時に他方に議会及政党に対する不信の高まれるは最近の著しき傾向である。殊に政党の收賄や議会に於ける乱闘は議会に国政を委托しうるや否やに疑ひを起させた。一部政党人に対立する国民全体政党の背後にあると思はれる財閥の利益に対する国家の利益がこの時において意識されることは極めて自然である。

第四は共産主義者に対する及感である。共産主義の主張する私有財産の廃止に喫せざるものは勿論であるがこれに属するものも共産主義者が我が国体を破壊する運動を企て労農ロシヤを祖国としてその指令の下に動くことは及発的に国体擁護と国

原本不明瞭

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

民主主義を強めた事は云ふまでもない。

第五は経済的不況である。最近に激化した不況は中産階級を没落せしめ下層階級の悲況を更に深刻にした。その対策を奈辺に求めるかについては意見多岐に分れるであらうが何等か資本主義の機構に変革を加へるの必要を感ぜしめた。悲境を体験しつゝある当事者が国家の経済統制を要望するのみでなく曾く悲境の埒外にある者も現状を救済することは国家の紐帯を緩めるものとして国家の名において対策を要請するに至る

第六は社会全般にみなぎる現状打破の要求である。我国の政治経済等の一切が行詰りの状勢にあり陰鬱の気が全社会にみなぎりつゝあるは今日に始まつたことではない。これがいやしくも局面展開の可能性ありと思はしめるならばいかなる壮図動に対しても敢て精細なる検討を試みる暇なくして渇仰し共鳴せしめる原因となる。マルキシズムが我国に不相当の勢力を得たのもこの心理に依存することが多いのであるがマルキシズムに結局信を置き得ない国民は対案を国家主義に求めたのである。

第七は満蒙への進出とその意外なる成功である。以上挙げた諸原因の結果であり、その意味に於いて国家主義発露の結果たると共に又国家主義の最大の原因となつたのは昨年九月以来の満洲事変である。一つの事件は必ずやある意識の結果であるそれと同時に事件は意識を確立せしめ強固ならしめる。満洲事変は国家主義の結果たると共に事変に関する報知や事変に伴ふ諸活動は一として我が中に潜在して自らも知らざりし国家主義を意識せしめる吹奏曲とならざるものはない。由来満洲は日本国民の国家主義的情熱を鼓動する歴史的因縁がある。恐らく今後とも永く満蒙問題は国家主義の水源地となるであらう。

九

以上の項目は重要性の順位による排列ではないがこれ等の原

原本不明瞭

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

因が幅奏して現今の国家の抬頭を招致した。由来国家主義はその様相として国民主義と革命主義と独裁主義とを持つものであるが上述の各原因を顧みれば此等の様相に照應することを見出すべあらう。即ち第一の軍縮問題、第二の帝国外交への反感、第七の満洲事変は国民主義を喚起せしめ第三の議會への失望は革命独裁主義を喚起せしめる。

然しもしこれだけならば現今の国家主義は単に反国際主義と反議會主義たるに止まるが国家主義抬頭の原因の中で看過すべからざるは第四の失産主義への反感と第五の経済的不況と第六の局面打破の要望である。失産主義はたとへ反感を惹起したとはいへ資本主義批判の眼を開かせた。経済的不況は當然に資本主義の変革を求めさせ局面打破は主として経済組織の打開を意味する。こゝに於て現今の国家主義は反資本主義といふ特異の色彩を帯びてゐる。これが従来の国家主義とその内容を異にする所以である。しかして現今の国家主義が単に反国際主義及議會主義たるに止まらず反資本主義的たることが国家主義と社會主義との接近を一應可能にした原因であり又国家主義と社會主義との結合を合理的たるかの如くに思はせた錯覚の原因でもある。

十

目下抬頭しつゝある国家主義は日本国民の廣汎な層にわたつて浸じゆんしてゐる。凡そこれと明白に対立する思想を把持せざる限り多少なりとも之にふり動かされないものはあるまい。だが特に国家主義の負担者たる数個の群のあることを忘れてはならない。その一は軍部であり二は官僚であり三は小農手工業者及小商人である。

もし議會主義にして完成してゐるならば軍部は政府に対して従属的の地位に退き軍人はそれぞれ何かの政党に所属する

に違ひない。然るに我国に於いては国際関係に於ける日本の地位からして軍備に重要性を置いたのと我が憲法が軍部に対して特種の地位の與へたために軍部は日本において権力を持つ特異の社會群である。加ふるに有為の材幹がこゝに集合し労資の階級から独立し政党抗争の渦中から脱却し身を以て国家主義の負担者を以て任じて来た。彼等は盡忠報公の至誠を持ち捨身を以て信を断行する実行力に富む。彼等の公共の善に対する執心は多とするも何か盡忠報公たるべきかに関する理論的検討を欠くことに遺憾がある。

官僚は我前ドイツの誇りたりしが如く日本の誇りでもあつた。開明專制主義を以て国内の施設を指導し来る政府は明治以来数多くして質の優秀なる官吏を育成して来た。たとへ彼等は近時政党の勢力の下に抑圧さるたとはいへ今も尚日本に於て無視すべからざる勢力を持つ。彼等もまた政党に偏せず階級に限

らず国家的見地に立つて至公至平のこゝかんを とらうといふ自信を抱いてゐる。国家主義はこゝに一方の支持者を有する。

もし資本主義が発展の極に達したならば小農や手工業者や小商人はプロレタリアに沈淪してその影を潜めるかも知れない。然るに我国の資本主義の幼稚なる段階と日本の産業の特種性とはこの一群の中産階級層をかなりの程度に保存せしめてゐる。彼等を国家主義に結ぶ特別の因縁はないが彼等が反国家主義思想以前の残滓たること、もし資本主義を自然の進行に任せるならば彼等は大資本家の圧迫の下に没落するの外ないので彼等のすがらんとするは唯国家の名に於いて其の進行を阻止することのみにあるからである。

こゝを要するに軍部と官僚と中産階級との勢力はいづれもが日本の政治的経済的進化が先進国より一歩遅れてゐることに原因する。我が社會が急激に変化せざる限り彼等の勢力は依然と

して持續するだらう。その限りに於て国家主義も又熱烈なる支持者を失ふまい。彼等は大資本家の横暴を憎む点に於て共同戦線に立つ、この点に於て彼等は等しく反資本主義的である。だが反資本主義は當然には社會主義ではない。いはんや中産階級は最も私有財産に執着するものである。反資本主義を當然に社會主義と誤認して国家主義と社會主義とを結合せんとした所に国家社會主義の迷妄がある。

だが私は次に視点を轉じて社會主義の方よりの国家主義への接近の跡をたどらねばならない。

我国の社会主義運動が少、なぜに国家社会主義が生ルかの理由を述べるためには、暫く本文の冒頭に立ち返って、国家社会主義と他の社会主義との異同を顧みる必要がある、他の社会主義とは、共産主義と社会民主主義とであるが、国家社会主義と共産主義との差異は、前者が階級国家論と国家死滅論とを採らないこと、国際主義を採らず国民主義を採ることである。国家社会主義と社会民主主義との差異は、前者が侵略主義を採るに対して後者が平和主義を採り、前者が暴力革命と獨裁とを是認するに反して、後者が議会主義と言論自由主義とを採るにある。

こゝにおいて何故に社会主義運動から、国家社会主義が生ルかと云ふ問題は別言すれば社会民主主義が何故に国家社会主義へと轉向しやすかと云ふことと共産主義から何故に国家社会主義への離脱が生じたかと云ふ二つの問題に帰着する。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

私はこの二つについて各々の理由を語らねばならない。

十二

日本の社会民主々義には、凡そ三つの潮流があった。一は理想主義的社会民主々義であり、英国の社会主義に類似するものであり、これに属する一派は社会民衆党内にある。その二つは、マルクス主義の上に立つ社会民主々義で、ドイツ社会民主党の社会主義に類似し社会民衆党の大部分はこれではないかと思ふ。その三はさいクス主義の上に立ち、今は暫く合法政党の仮面を被るも必要あらば暴力革命と独裁とを辞しない一派であり、その多数が労農大衆党にある。

これ等三派の社会民主々義の内、第三のものは事実において共産主義と異ることなきものである。従って厳密には社会民主々義には属せしむべきではなくて、次の共産主義の範ちゅうに含ましむべきである。第一の理想主義的社会民主々義

こそは真正の社会民主々義を代表するものであり、その社会哲学に於て個人主義を採り、国際平和主義を守り議会主義と言論自由主義とを固執するものであるからこれと国家社会主義とは必然に対立し矛盾する。この一派は今に至るも国家社会主義と抗争しつゝある。

第二派は社会民主々義をとるけれども、マルクス主義の理論を受容するものである。然しながら私見によればマルクス、エンゲルスの根本思想と其文献とからは、社会民主々義よりも共産主義が帰結すべきであり、この点においてマルクス主義者たる限りにおいては、カウツキーよりもレーニンの方が正当だと思ふ。従って第二派は社会民主々義を唱へてはゐれども、議会主義と言論自由主義とを守らざるべからざる確固たる信念があるわけではなかった。この派にはも早晩共産主義に転化すべき可能性が多分にあり、しかして包蔵されておったのである。彼等が社会民主々義に

ぎない。然して最近の国家社会主義は彼等と共に心として擡頭し来つたのである。

第三

然らばこの一派は何故に国家社会主義に傾向したのか、之には次の如き数個の原因があると思ふ。

第一に帝国議会及び府県会に対する失望である。議会に対する失望の中には三つの種類がある。その一は凡そ議会と称する会議体の国政の審議機関としての職能の限界に対する失望である。この種の失望は誠にもつともであり、議会主義者は慎重にこの問題を考慮せねばならない。だが然し、この点が議会への失望となつたとはすくなくとも日本の社会民主主義者については事実ではない。

第二に議員の選出方法に関する失望である。一言にして云へば現存の選挙法を以てしては、民衆の意志が適確に議会に反映しえないと云ふ失望である。これもまつたく無理ならぬ不満であつて至急に選挙法の改正を企てることは、議会主義者の義務だと思ふ。第三の失望は最近における無産党の勢力に徴しての、未来の発展性に対する失望である。現行選挙法の下に無産党が不利なることはもちろんであるが、現在においても今より以上の勢力を獲得することは困難ではない。然るに戦線の不統一、民衆の自覚の不足、無産党が選挙に対する準備の欠乏等が此不結果を来した。獨逸社会民主党や英国労働党の歴史に徴すれば、不利な條件に於ても着々として勢力を伸張し得る筈である。然し忍耐と辛抱とを持たないわれは遅早く議会を通じての社会変革に絶望を抱くに至つた。

第三は共産主義者に対抗する手段として、国家社会主義による外ないことである。我国現下の社会主義運動界に於て社会民主主義者と共産主義者とはその思想に於てもその感情

原本不明瞭

に於て相対立しつゝあるが、社会民主主義者が共産主義者と自己を区別しそれと対抗する旗しは、従来議会主義を採ることにあつた。然るに前項の如き理由により議会主義を絶望することせば他に対抗すべき旗しを求めねばならない。かくして選ばれたのが国家主義であつたと思ふ。

第三は最近の国家主義の横溢に影響されて、平和主義と国家論に動揺を生じて来たのであるがこれは次項の共産主義と一括して説明しやう。

要するに以上の理由が従来社会民主主義を唱へた人々から国家社会主義への傾向を促した説明ではなつたかと思ふ。

十四

それでは共産主義者又は擬似共産主義者の一群は、何故に国家社会主義に傾向したのか。擬似共産主義者とは明白には自ら共産主義者とは呼ばぬので、一応社会民主主義をとるものが

外観を装ふ。共産革命独裁を是認する一派である。議会主義と言論自由主義とを、ゆくゆくからざる確信を以て固執するものでない限り、その人は擬似共産主義者であるから、わが国の社会主義者中に於て此種の人々は決して少くない。彼等は革命独裁を是認するものであるから、この点に於て彼等と国家社会主義者とを区別させる何物もない。彼等相互間の異別は侵略主義か国体主義か民族国家論か階級国家論か日本の国体を是認するか否かとかゝる点にあるが、後篇をして共産主義を脱せしめたのは、次の理由にあると思ふ。

第一は日本の共産主義者の中から、漸くマルクス主義に対する批判が現はれて、自己の本質を自覚したことである。

マルクス主義は少なくとも思想界に於ては、燎原の火の如き勢を以て我国を席捲した。それは国際主義と階級国家論と国家死滅論とを教へた。今まで盲目的に無批判的にマルクス主義を受

答した人々は、これ等の理論をも、無條件的に信じてゐた、然し今や日本のマルクス主義は其発展史上一段落を経へて、一応宣伝力の能弘度に果た、民衆がマルクス主義の何たることかを知らぬ以上は他を顧る暇なく、これを捕捉したが今日漸く静かにマルクス主義の内容を検討し審査し批判する段階に到達したのである。然して前回に於て述べたように、日本人の間に国家主義は容易に抜き難き勢力を持ち、唯思索の修練を経た者のみが、これより脱却することが出来た。然して日本人に根蒂深く植付られた侵略主義と民族国家論と国体論とに直面して、マルクス主義はこれを覆すほどに民衆の心の底に浸透してはゐなかったのである。

マルクス主義に対する無批判時代を経過して、静かな反省の時代にいる時に、不抜の国家主義が再び胸奥より擡頭して、マルクス主義より脱却させるに至ったのである。然しこ

最近の思想界に於ける国家主義の擡頭がこの傾向を促進したことは云ふをまたない。

第二に日本の共産主義者は、日本に於て社会主義を実現するに当り、何か障害となるかを意識するに至り、暫く国家主義と妥協することを戦術上の方便と考へたのである。前項の理由は心からのマルクス主義からの脱であるが、これは心に転回があったのではなくて、実現手段としての術策である。曾てバートランド・ラッセルは前世紀の末に「ドイツ社会民主主義論」を書いて、マルクス主義がドイツ国民によって迎着する障害を挙げて、一は無神論たること、二は家族共有論たること、三は国際主義たること、四は革命主義たることだと云った。我国にあてもマルクス主義に対する反感は、これが社会主義たることにあるよりも、寧ろ他の方面にある。無神論や家族共有論や革命主義たることは、日本に於ては獨逸に於けるが如く反感の原

因とはならない、筆者の重大な反感は、国際主義たることと日本の国体を破壊するとの二点にあると思ふ。

この二点に逢着してマルクス主義は巌に当る波の如くに砕けるの外はない、此難点を処置せざる限りにおいて、日本のマルクス主義の発展は限界つけられてゐる、若し明敏なる社会主義者があるならば、速早くマルクス主義から暗礁となるべき理論を削除することは、少なくとも戦術上には巧妙な試みだと云はねばならない。

十五

社会民主々義と共産主義との一派から、国家社会主義への轉向を説明した以上の叙述にじて誤りがない、ならばこの轉向には依然の経路と偶然の経路とがあると思ふ。

社会民主々義は議会に失望して議会主義を放棄すべきではなかった。彼等は一方において現存議会制度の改革を実現すべきであると共に、他方において今よりも大なる熱情を以て議会主義に直進すべきであった。彼等の最近選挙に対する失望は始めより予期すべき失望であって、之によって今更に議会主義に疑ひを挿むべきものではない。彼等の議会主義が如何に始めより共産主義者に対抗する烙印として、彼等は依然議会主義を固持すべきであって、国家社会主義に鞍替すべきではなかった。

マルクス主義の階級国家論や国家死滅論や国際論は、始めよりして誤謬であった。今日これを悟ったことは時が遅かりしを歎ずるが、然し悟らざるよりも優ること数等である。だがマルクス主義を無過失でないと認めることは、国際主義より侵略主義へ轉換することが正当だと、ふことにはならない。もしまた単に社会主義実現の戦術として国家主義と妥協するが如きは、眼前の功を急いで却て自己の理論體系に混乱をひき起し、折角

より出で、寧ろ打算に反する結果を醸すに過ぎないだらう。社会政策者の念とすべきは、明確な思想體系を保持するにあつて事態に順応する変通の術に耽るべきではない。彼等は今重大なる過失を犯しつゝある。

だが国家社会主義への轉向が必然性を欠いてゐやうとも、これは批判であつてこれによつて轉向の事実を無視することにはならない。

日本国民に不拔の根底を持つ国家主義は、今や潜在より表に顕在となり時を得顔に横溢しつゝある。この潮流に乗じて国家社会主義は相去多数の社会主義者を率ゐて小が社会運動界に一勢力をなすであらう。然し前稿「国家社会主義の批判」に述べたるが如く、国家主義と社会主義とは相反発する異質物である。偶然の事情が暫く国家主義を資本主義たらしめ、社会主義を国家主義に接近せしめたに過ぎない。やがて彼等自らが全

体の矛盾を意識して袂を別つに至るまで、自己と伴侶とに錯覚を抱きつゝ、手に手をつないで進むだらう。唯彼等が別背する時は日本の社会主義運動に惑乱を生じ、保守主義の勢力を増加するといふ憐れな業績を残して、社会主義が国家主義より抛擲される時であらう。

十六、

最後に国家社会主義擡頭の社会思想史上に於ける意義に關しやう

この擡頭は我国において国家社会主義なるものが、いかに根帯のあるものかを知らしめた。マルクス主義がかくも思想界に勢力を揮ひたるに拘らず、結局国家主義を精算するには何の効果もなかつた。而して国家主義の強大なるところ、そこに社会主義は永久の躓跌の石に逢着せねばならない。この石を除去せずして日本の社会主義は着実の前進をなし得ない。外国におい

て国家主義の牙城を破るものは、実に理想主義的個人主義であった。社会主義は決して理想主義的個人主義を敵とすべきではなくて、それをして自己の前進の路を開拓せしむべきであった、然るに国家主義と照応して理想主義的個人主義を挟撃した結果は遂に社会主義をして国家主義を尚進せしめずして社会主義は保守主義の圧迫の下に苦しまねばならなくなった。自らまける種子を自らからねばならないのは、惨ましい思想界の悲劇である。

次にこの難題は、我国のマルクス主義の普及が一転機に来たことを物語る。無人の境を行くが如くに侵入したマルクス主義は、外延的には一応普及の飽和点に達したと共に、徐ろにマルクス主義を批判する時機に来た。その階級国家論と国家死滅論と、消極的国民主義とも無視する理論とは早晩清算せねばならなかったのが、今や其時は到来したのである。然してこれ等の理論の清算は単にそれのみに止まらないで、更に進んで唯物弁

証法の逆転、ネップ法案の手を経ねばならない。更に今日でマルクス主義者たるかの如く思はれ、マルクス主義に反対するものはあたかも人でなきかの如く思はれ一つの思想を採るか否かに道徳的評價を伴ったのは、我が思想界における奇怪な現象であった。このことがマルクス主義者に石混こうを引起し、マルクス主義のためにも悲ぶべきことではなかった。今やマルクス主義と反対の思想を持つものが、堂々と社会を歩み得ることは、思想の自由と云ふ立場からは、少なくとも一飯の進歩だと思ふ。

最後にこのたい頭は、新たなる社会思想を待望せしめる。マルクス主義が一転機に来たことは思想界の喜びである、然しそれよりの脱が、国家社会主義への転向を意味するならば、思想界の損失でなければならない。マルクス主義か国家社会主義かの二者択一のみが存在するは、我国において他の社会思想の

體系が存在しないからである。ラッサール曾て曰く、世に憂ふべきは一の誤りに誘導された他の誤りであると。誤れる國家主義は誤れるマルクス主義を誘導し、更にそれは誤れる國家社会主義を誘導した。マルクス主義から階級國家論（國家死滅論と）と無批判的な國際主義とを整理し、当然に其前提として唯物弁證法の哲學を清算する新らしき思想體系の出現こそが、現下の日本の緊切な要望でなければならない。しかしてそれは理想主義的社会主義でしかありえない。

もしそれマルクス主義の革命擁護主義は、本来國家主義に伴ふものであり、それなれば、大に於いて、國家主義が優勢なるに伴ひマルクス主義がかくも強力を増りえたのである。マルクス主義者は言論の自由を唱へて、社会進化を常正に導くべきであったにも拘らず、從らに民主々義を敵とするに急なる余り、社会を挙げて暴力行使と專制獨裁とに傾け

しめた。左右両翼は互に暴力を揮って、社会を挙げて修羅の巷と化してゐふであらう。その被害者は結局においてマルクス主義者であることを銘記せねばならない。この内にあって議会主義と言論自由主義とは、便耳にいらざる大声の如くであるが、血塗れの修羅場から、最後に民衆の口から叫ばれるのは、議会主義と言論自由主義とである。だがそれまでの間、暴力行為が公然と行はれねばならぬとは、いかに憐れなる日本國民の思想の水準であらう。

「完結」

吉野作造執筆

國民社會主義運動の史的検討

（国家学會雜誌第四十六巻第二號）

警保局保安課

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

国民社會主義運動の史的檢討

去年の夏頃から思想界に又社會運動の実際界に国民社會主義なる者が叫ばれ又論ぜられて居る。河合教授は帝国大学外聞に於て之を一の思想として純理の方面から詳細に批判されて居られるが私はまた之とは違つた立場から即ち最近史上に特異な一現象としてこの動き迄考察して見ようと思ふ。推測臆断に陥ず誤解を乞ふ。

国民社會主義外提唱の歴史的因縁は第一に最近我国に於て共産主義に対する反感が著しく擡頭したといふ事実と関聯して居ることが出来ない。共産主義に対する反感は国民より今に始つた事ではない。左右両翼の対立といふも我国では随分久しい話なのである。許謂日本共産党は共産党員に非る者は共産主義者に非ずと云つて居るけれど客観的事実として共産党に属せ

原本不明瞭

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

ざる多数の共産主義者あることを否定し難く、之を概称するものとして左翼の名が与へられ小る。之に対する右翼がまた例へば社會民衆党系の人達に限らざることは云ふまでもない。外に中間派なる者がある。従来共同戦線党の異名を附せられた丈け戦線の急速なる統一を叫び指導精神の吟味の如きは第二第三の問題だとの立場を執つて居つたから思想的には右翼の筈の人も又左翼に劣すべき筈の人も雑然籍を同うして居つた。（従来共同戦線党であつた労農大衆党は旧臘の大會でこの点を改めた）それでも大体の傾向といへば漠然に我々は社會民主主義を賛すとは言ひ切り難く寧ろ共産主義に同情を寄するが如き口吻を洩らすを常としてゐた。この事実は個々我国の左産運動界に在て共産主義の名称が如何に多くの無批判的讃美者を有つて居つたかを語るものである。而して私は今改めて云ふ斯の言葉が昨今少し変つて来たのだと。どうして変つたかに付ては問題だから茲には述

べぬが兎に角斯うした変つた事情が自ら国民社會主義の叫びを喚び起した一の原因ではないかと私は思ふ。

共産主義が無産運動界を五年少讀書階級を風靡して居つた頃は右翼の人でも其の主張を系統的に説明するに當つては先づ共産主義者の掲ぐる綱領を取り其の多くのものは自分達の固より及対する訳にあらずと為し又小かく僅に一二の個條につき断じて同意が出来ぬのだといふ風に議論を組立てるのが普通であつた。議論をする本人はさうでもないのであらうが局外から觀る と敷々就々として余り強く共産主義に突き掛るまいと顧慮する ように見へた。訳が共産主義に対する世間一般の人氣が変つて来つつある事の人々の態度も変つて来る。何時とはなしに共産主義対抗の態度が低調になり沒氣に流れて来た。之と伴つてまた 又を排撃する論調も殆んど無へて来た。国民社會主義の提唱が斯うして 次第に広まつたと云ふ様に数分の説明があらう。併し之等（2）

原本不明瞭

の意味が故主義の提唱を便にし其の普及を扶けたことは疑のな
き所である。

従来右両翼が対立の論点としたものは主に独裁主義の是否
であつた。プロレタリアをして政界に優位を占めしむべしとの
主張には一致して居つたが右翼は民主主義の原則に依り各理意
見の自由競争を認め其の競争の裡から自家の勝利を開ひ取るべ
きとし、又其可能を期待したのであるが左翼は従来の経験を稽と
し右の方針の実際上の不成功を断じ暴力に依て自派の独裁を確
立すべく又近き將来に於ける其の成功の可能を主張し来つたの
である。此点に於て右翼は一面に於て議会主義者と云ひ外左翼
は革命主義者と云はれたのでもあつた。而しい左翼傾向の人達
は革命の実行を回避し点に右翼の位置を為倒して得々たるも
のがあつたのだが既今攻勢的傾向の指導に連れ共産系陣営の論
鋒の鋭るや右翼傾向の圏内には得たり賢しと勢に乗じて従来と

に違つた種々の論点から反撃を共産主義に加ふるものを生じた
のである。共産主義の二大特色の一たる国際主義の排撃を目的
とする国民社會主義の叫びも慥にその一であると私は考へる。
国際主義といふ観点から云へば従来は右翼は第二インターナ
ショナルに同情を寄せ左翼は第三インターナショナルを支持す
るに云ふたりの差に過ぎなかつた。然るに右翼の一角から最近
強く叫ばれる非国際主義は一面には従来と同様に第三インタ
ーナショナル主義を排撃するに外ならざるも他面に於て事々し
く「国民」の二字を社會主義に冠せしめた所に新しい一特色を想像
せしむるものがある。左翼従来の主張のやうに中央勢力の命令
を奉じ各国が之に服従することに依りて統制ある国際的協同に
参加するといふ主義は我々の国から肯じ得ざる所であるが彼我の
国家と国家を相互に牽制する一定の限界内に於て協同するとも
いふべきものは従来同情を寄せてゐた第二インターナショナル
（ママ）

原本不明瞭

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

この主張と格別異る所はない。斯くして国民社會主義と云つたこと迄つたことを主張するのではないと釈明につとめる人もある。併し乍ら傾向的に云ふならば今日の国民社會主義提唱者は一定の限界内に於ける国際的協働といふ事に第二インターナショナル主義者程の信用をすら置かず協働をすれば国際協働の困難なる方面を力説して寧ろ主力を民族主義に傾向せしめんとするかに見えるのである。之が一歩を進めると従来の社會主義綱領の重要條目の一とされた階級連帯論の大修正となり更にまた一国内に於て階級的主張と対立的要求とを対立させるとなると場合に依ては唯物史觀の放棄となるの恐なしとせぬ。斯ふなつては大変だといふのではない。私自身としては斯かる混乱に陥つて社會主義の味はれることは寧ろ必要な事だと思ふ。一国内に於ける階級運動が解散から一顧を要べき水準にまで高められた神経が今日尚ほ

「ル」に主張せら水るのを観て私はたゞ時勢の急変なる変遷に驚かざるを得ないのである。

国民社會主義の提唱をファシズムの一現象と説く人がある。この提唱に伴ふ各方面の動きを綜観しこの説に一應の理窟もあるやうに思ふが社會主義実現の為に運動を先づ一国内に限らうとの方針そ水自身には何等ファシズムの要素はない。たゞ之を提唱する人の間に同時に議會主義否認を要綱目に掲ふるものがあるので意味の取り様によりては此事がファシズムの疑を受くる理由とならぬこともない。

議會主義否認といふ代りに議會万能主義排斥といふ言葉を使ふ人がある。無産階級の運動が議會中心の政治運動に没頭し過ぎ労働組合の経済的培養を怠つたと思はる水た時代にこの叫びは可成り重要な節制的効果を現はした。之は議會政治の大改革を要する意味に於ける、現制否認論と共に議會制度の根本的否認論

原本不明瞭

ではない。けれども若し議會は到底政党と財閥の独占する處だから絶対に此制度を打破せねばならぬと云ふことになれば茲に始めてファシズムに轉向する危險を恐れなければならぬ。何となれば議會主義は其の本質に於ては各種の言論の自由を尊重しその道義的競争の結果として優者に政權を託する制度であり又斯る趣旨を実現せしむるものとしては考へ得べき始ど唯一の制度だとされてゐるから(勿論改善の余地は多々あるが)これを絶対に否認することの當然の帰結はクーデターに依る政權奪取の公認でなければならぬからである。誰れがクーデターを叫ぶと期待するのか。プロレタリアがやがて共産主義になる。共産主義を真正面の敵とする国民社會主義がもしクーデターに依る政權奪取を支持するのだとすれば必然にファシズムにならなければならない。ついでに云ふが先きに共産主義の性質を排撃した社會民主主義が国民主義と妥協し同じ仮装に義

に轉ずるのは変なやうだけれども之は本来お互に主義としての独裁に反対するのではなく自分だけ勝手に振舞ひたいと言ふのだから他方の勝手に振舞ふを許し難いと云ふ意味で自家の独裁を要求するは當然である。而して自分が勝手に振舞はんとする以上事実に於て他者のまた同じく勝手に振舞はんとするを阻止し得べくもないから客觀的に云へば政權の移動は遂に無政府的混沌狀態に投げ込まれざるを得ず、偶々權力を壟断し得た一党の極度にして周到なる專制に依てのみ一時の小康が保たれるを常とするに至るのである。

併し今日の國民社會主義の提唱者は一体どの程度の議會制度否認を考へて居るのか。今のところ此点未だ十分はッきりして居ない。

議會否認論を仲介として国民社會主義を主張する一派と反動的社會主義派との間に一種の連絡が生れたといふ事実(5)

原本不明瞭

し我々の緊密なる注意に値する。斯うした連絡が出来た結果、社會民主主義者の一部が無い国民社會主義と看板を塗替へたのだといふ説もあるが之は穿ち過ぎた流言であらう。兎に角右様の連絡の実在は今日公然の秘密として各方面に傳へられて居る。

反動的社會主義とは従来国家社會主義と呼ばれたものを指す。社會改造の方針として彼等は大体に於て一般社會主義の掲ぐる綱領を採用するが、肝腎の階級闘争並に国際連帯の戦術は拒否する。この点に於て純社會主義派からは裏切者と呪詛されて居たのであるが、厂史傳統を尊重すると云ふ名義の下に民族主義を高調し又階級闘争の華々しさに代ふるに急進的専制主義を説する点に於て幾分国民社會主義の先駆を為すの趣があつた。而して今日の国民社會主義がこの一派と多少の連絡を有つといふことは同時に我々をして国民社會主義が国家社會主義と結合するのではないかと疑はしめる。国家社會主義は取も直さず現在の国家をして社會主義の綱領を実行せしめんとするものである。現在の国家には斯んな能がないといふのが従来の社會主義の立場であつた。従て国家社會主義は所謂社會主義派よりは無産階級の陣営に属せざる反動的立場に在るものとして全然除外されて居つた。それが今度社會主義派の一角と提携せんとして居るのである。彼方が階級対立論に降参して来たのでないとすれば或は国家権力の奪還を先決問題とする社會主義在来の立場が国民社會主義の出現に依て吹き飛ばされてしまうのではあるまいか。比点も亦深甚の注意の向けられねばならぬ所である。

ついでに云つて置くが無産政党にも根據の明ならざる対立反目がある様に、国家社會主義の主張者間にも数派に分れて暗闘を続けて居る事実がある。而して其の全部が今日の国民社會主義の動きに合流して居るのでないとは言ふまでもない。

軍部と国民社會主義者との連絡の所由に就てはまだ厳秘に附

原本不明瞭

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

されて居る部分が多く流言蜚語を綜合して一應の描写を試み難からずとするもそれは少し事情を顧みにした上で論評するを得策としよう。兎に角最近軍部の一角に政治に多大の関心を寄せ更に其宿弊を打破し国家を救厳ふ医救するの目的を以て積極的行動に出でんとする一團を生じたことは周知の事実である。軍部は元来実際政治に関與せざるを特色として誇示して来たこの多年の傳統をすてて政界に我れから乗出さうと云ふのは能く能くの事である。何が軍部をして斯かる決意を爲さしめたか。申すまでもなく政界の腐敗がそれである。尤も冷静に考へれば明治時代の藩閥政治と大正以後の政党政治と何れが多く弊害を流したかは一個の疑問だと思ふけれども世人が当初民衆本位の善政を期待して政党を迎へた丈け彼等が国家を極擲して党利党略に没頭するに極度の憤慨を寄するは怪しむに足らぬ。而して軍部の人達は之等の点を多く無産階級の論議に聞いたものと見へ

政党と同じ程度の反感を藩閥にも寄せて居る。つまり既成政党と藩閥とが現に国家を毒して居るといふのである。併し茲までは軍部の人ならずとも無産党方面は勿論の事に於ある国民の一般に抱懐する所の不満であり軍部の人も国民の一人として此種不満の表明に参加すると云ふは考へ得られぬことではない。が一歩を歩めて単にこれ丈けの事情で積極的非常行動に出でようまで決意したといふ段になると容易に首肯することは出来ぬ。之には何か外に直接軍部の利害に関係する重大な要素が伏在してゐたのではあるまいか。

斯くして私は最近の軍縮会議を聯想する又倫敦條約に関して起つた統帥権問題の紛争を聯想する。私は先きに軍部は永く政争に超然たることを誇りとしたと述べた。別天地の殊遇を受け専閥に骨折つたお蔭で我国の国防は今日現に見るが如き世界優秀なものに出来上つたのだ、この点我々は大に感謝するのである

原本不明瞭

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

が同時にまた殊遇の地位に泥れて専恣横暴に失するの譏もなかつたのではないと思ふ。遠望すれば功を功とし弊を弊として賞黜を明かにするは必要な事だけれども不幸にして軍部の人達は概して大局を見るの明を欠くと云はれて居た。それはそれとして自家の専恣を責むる相手方が政党者流であるとすれば軍部の人達の承服を肯んぜざるにも無理がないといへる。突き詰めて考へたら軍縮其事には必ずしも反対でないのかも知れぬたゞ軍縮といふ政党政治家の参加により甚しきは其の主たる裁量に依て決せらるゝの危険に戰かざるを得ないのであらうが夫れ統帥権の問題に至つては表向きの論議には左したる極端論もなかつたけれど世上には其の不合理を説くものが尠くは無かつた。乃ち政界一般の空気は甚だ軍部に不利なのである。之を何とか始末せずんば国家は遂に安泰なるを得ずと思ひ込んだのではあるまいか。

もう一つ彼等は政党政治に対する廣汎なる国民的不満の事実より推して彼等の積極的進出が必ずしも時勢の要求と矛盾するものに非るを信じたのではあるまいか。軍部の人達と雖も大衆の支持なくしては今日天下に大事を爲し得ない事を知つてゐる。既に精神的共鳴ありと考へて一種の決意を定め一般大衆の支持を現実にせんとて無産政党の一角に渡りをつけたといふ者あるも強ち無稽の推測ではないやうに思はれる。

国民社會主義と軍部と反動的国家社會主義との三派連携。之により近き將来に於て何事を期待せよと云ふのか。政治的には既成政党を打破する経済的には大財閥を崩壊せしめる新に強固なる権力を樹立してまがひもなき正眞正銘の社會主義的政治を実行すると云ふ。プロレタリアの優位が引込んで代りにクーデターに依る政権獲得が登場する。果して然らば之は何の点でファシズムと區別さるべきものであらうか。

議會否認といふやうな論は実は我国無産論壇に於て新しいものではない。左翼の極端なる者は絶対的否認論をかざして一切の選挙に手を染めなかつた、否らざる者も議會を階級闘争の具に利用すると称し議會に出ても消極的に既成政党の仕事を妨害するに止むべしと主張して居つた。斯うした議論の幅を利かして居る中に僅に右翼の社會民主主義者のみが孤塁を守つて議會協働の旗幟を推立てゐた。始め右翼は単にこの理由だけで人氣が無いのに焦慮したのであつたが昨今は多年の経験の教ふる所に依り輕佻の空論を去り社會民主主義の下に健実なる結束を確立せんとするの傾向を示して居る。然るにこの一角からまた國民社會主義の提唱に逢ひ之を可なり徹底的な議會否認論が勃発しかけたのだから我々は驚いた。が考へて見れば之にも実は相当の理由があるやうだ。

主たる理由は最近の数次の選挙の結果だ。抑も無産政党の議會進出は昭和三年の総選挙から始まる。普選最初の選挙として世人は無産政党の前途を祝しつゝ猶未だ多くの收獲を期待しなかつた、従て挙げた結果には大抵満足の意を表し更に一層の発展を次回の選挙に希望したのであつた。然るに昭和五年の総選挙は如何、更に翌六年の府縣會議員の改選は如何。無産政党は何れも振はないが中にも右翼の不成績は最も甚しい。局外の私共の立場から云へば之には種々の原因を挙ぐることが出来る。が方翼無産政党の指導者としては実際上天下に向つて最早義理にも議會政治結構でござるとは云へなくなつたのである。退いて彼等は一応考へたらしい、欠点は無産党自身にもある、主たる原因は政界財界の有力者が相結托して或は法律的に或は警察的に巧妙なる方法を以て極力無産階級を伸びしめざらんとする点にある、如何に議會で堂々と争はんとしても出発点が斯んな風では手の下しやうがない。斯くして彼等は之等の不當取締乃至不當立法

の排除に成功するまでを限り或る種の直接行動に出づるも已む
を得ないと考ふるに至つた。議會で滿足な協働をなし得るに至
る迄の直接行動といふのではあるけれども、右翼穩健派の陣營内
に直接行動論の萌し始めたのは蓋し右の如き事情に基くものと
考へる。

議會否認論は昨今世界の流行だ、独り我國に於ける唱導を異と
すべきでないと云ふ人がある。西洋の流行が我國に影響したと
云ふ意味に於て此説は首肯されるが西洋に在て議會否認論を促
したと同じ原因が我國にも活いて居るのだと考ふるものあらば
そは恐らく間違ひであらう。

議會制度が立憲政治の精神を十分に發現し得ないと云ふ立場
からの非難は昔からあつた。根本的に議會にその能がないと説
くものもあつたが多くは種々の改善を加ふることに依て理想に
近付かしめ得べきを信じて居るやうだ。比意味の非難なら無論

我国でも珍らしくない。たゞ西洋の場合と異るのは彼に在ては
実際政治家が率先して改革の急を叫んで居るのに我国では政治
家の方は案外平氣であり寧ろ改革をよろこばざるが多く改善の
論議は僅々一部の学者乃至操觚者に委されて居ることである。

歐洲大戦後議會制度は彼方に於てまた別の意味に於て問題と
されてゐる。少し話は抽象的になるが人事に於ては時として秩
序を必要とすることあり又事功を急務とすることがある。一つ
の例を我が文官任用令に取らう。之が不純な獵官運動を封じ官
界人事の移動に整然たる秩序を立つるの効あるは疑ないけれど
も之は同時に適才を適處に配する爲の自由簡拔を許さない、從て
官界の空氣を低迷せしめる恐れもある。各々一利一害あるが平
常の時期に際會して事功を擧ぐる点に遺憾あるを認めねばなら
ぬ。斯ふ云ふ次第で歐洲大戦並に戦後の非常時となつて議會制

度は国に依て堪へ難き極楽と感ぜられるに至つたのだ。ヘブル
は大勢の安定すると共に（いつの事か判らぬながら）議會制度は
――無論幾多の改善に面目を一新して――政界の中枢機関とし
て其の地位を恢復しよう、たゞ現在のところは特定の事功を擧ぐ
るに急にして迂遠なる議會制度に倚り難いとする事情があるの
である。ファシズムやボルシェヴィズムの西洋先進国に於ける
擡頭はみな此觀点から説明さるべきものであらう。亞洲二三の
国に於て獨裁政治が起つたからとて議會主義の前途を本質的に
悲觀すべしとするは當らない。但し獨裁政治の行はれて居る處
では勿論の事然らざる国に於ても議會制度の機能を批難する声
の昨今頗る高いことは事実だ。之が我国に於ける議會否認論の
流行を助けたことも亦認めねばなるまい。而して彼方に在てそ
は非常時に處して特殊の事功を擧ぐるに急なるの結果なのだが
我に在ては腐敗し切つた政党財閥の手から政権を取上げようと

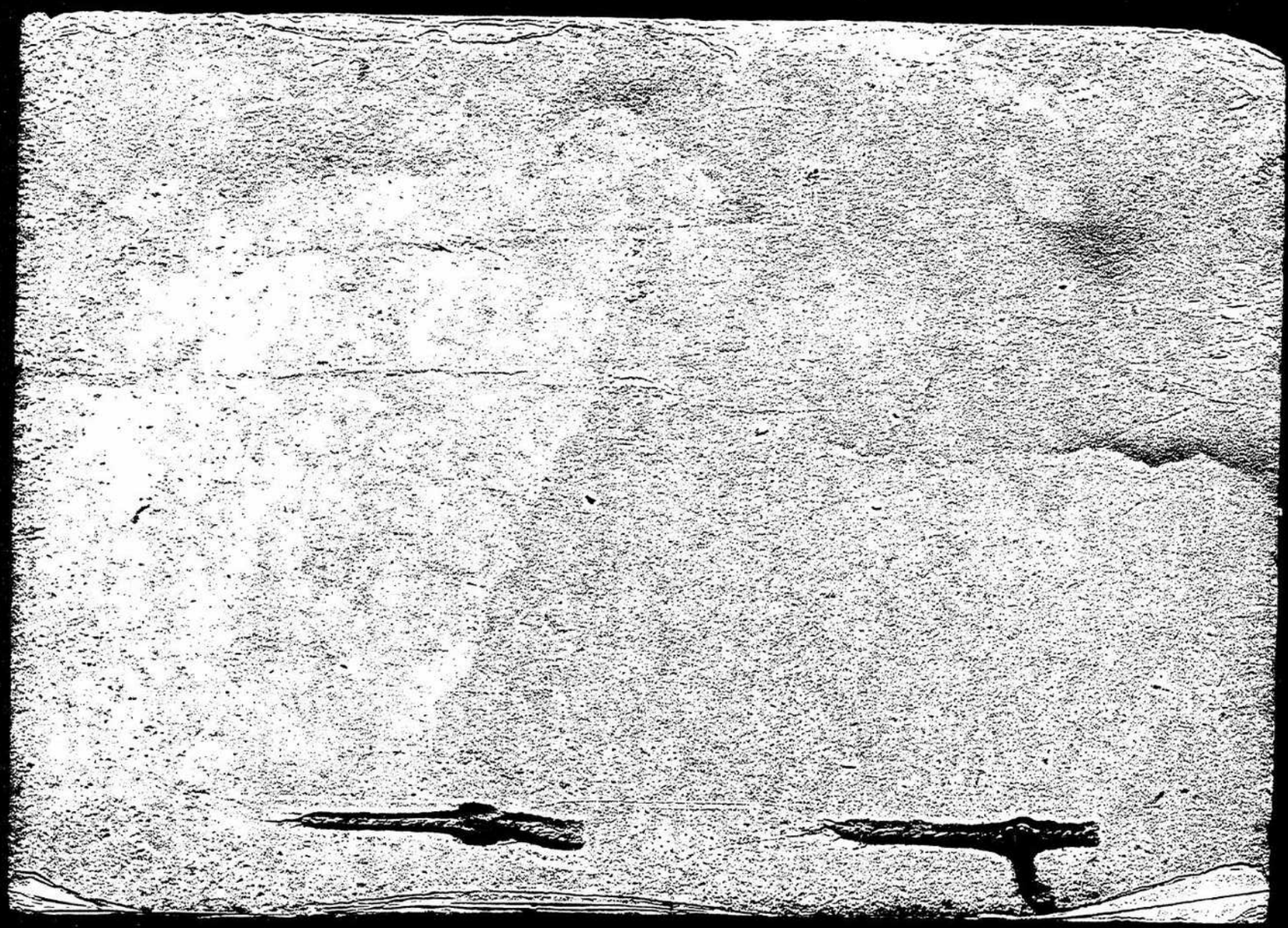
云ふに出發点を有する。其の根底に積極的の強味がないのも當
然である。

国民社會主義は一個のイズムとして今のところ未だ浮動状態
に在る、之が結果どんな所に落ち付くかを判定するにはもう少し
時間の経過を必要とするらしい。只疑のないのはこの提唱に依
て従来の社會主義理論の根底が揺撼され従て近く再吟味時代が
来るだらうと云ふことである。国民社會主義の名に頼つて聯想
される所謂三派連携の非常運動に至ては私は不幸にして之に多
くを期待し得ない。満洲事変に関連して由来對外問題に昂奮し
易き国民大衆が目下軍部禮讃に傾いて居るのは事実だが彼等に
果して之等の大衆を組織して有力なる支持團体に作り上げるの
技能ありやは大に疑はしい。国家社會主義者は殆んど問題にな
らず国民社會主義派と雖も実は無産運動右翼の陣営に於て主た
る本流を爲すものではない。満洲事変に関連して言論の自由を

欲く無産團体は自らまた国民社會主義の論駁に於ても陰忍鋭鋒を藏めて居るかに見へるが事実に於て国民社會主義がいろ〳〵の意味に於て無産陣營一般の同情に恵まれて居ないことは疑を容れぬ。一部の人はクーデターには主義として反對だが政界の腐敗が余りにひどいから一度軍部の力で洗掃して貰ふのも一案だと考へて居るとやら。或る有力な学者で今日まじめに国事を憂へて居るのは少數の有識志士と軍部の人達のみだから之等の人々の協力に依り一時の便法として非常手段を執るも已むを得まいと説いてゐる人もある。斯んな微温的な態度では心元ない。が下中弥三郎氏の新党樹立計劃の如きは事に依つたら前掲種類の有志を組織せんとするものかも知れない。華々しい門出にケチつけては済まないが私一己の意見としては今のところ其前途に多大の希望を繋けることは出来ない。

此時に當り社會民衆党と労農大衆党との間に合同の機運の動いて居ることは大に注目に値する。去年の労働倶楽部の成立に端を發し労農大衆党は分裂を賭して戦線統一主義を精算した。斯くして最早指導精神に於て社會民衆党と對立する理由はなくなつた。所が社會民衆党の方が其の一角に国民社會主義の提唱を見、そは社會民主主義と別物ではないなどと理窟を捏ねるものもあつたが実際上労農大衆党の追ひ縋る手を振り放して飛んでもない方向に逃去る形のないでもなかつた。之が去年の暮社會民衆党内部でも問題となり種々協議の上指導精神の不変を宣明し新に労農大衆党を誘つて反共産主義の新党組織を提案すべきことを内定した。一月十九・二十の両日に開かれる党大會に於て結局如何の決定を見るか分らないが大勢は既に明かだ。外に国民社會党の創立を見ても之に依て從来の右翼陣營に格別の動揺あるべしとも思はれぬ。之等の点はなほ静かに今後の経過に徴しよう。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/